

熊山遺跡

岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報

1974年3月

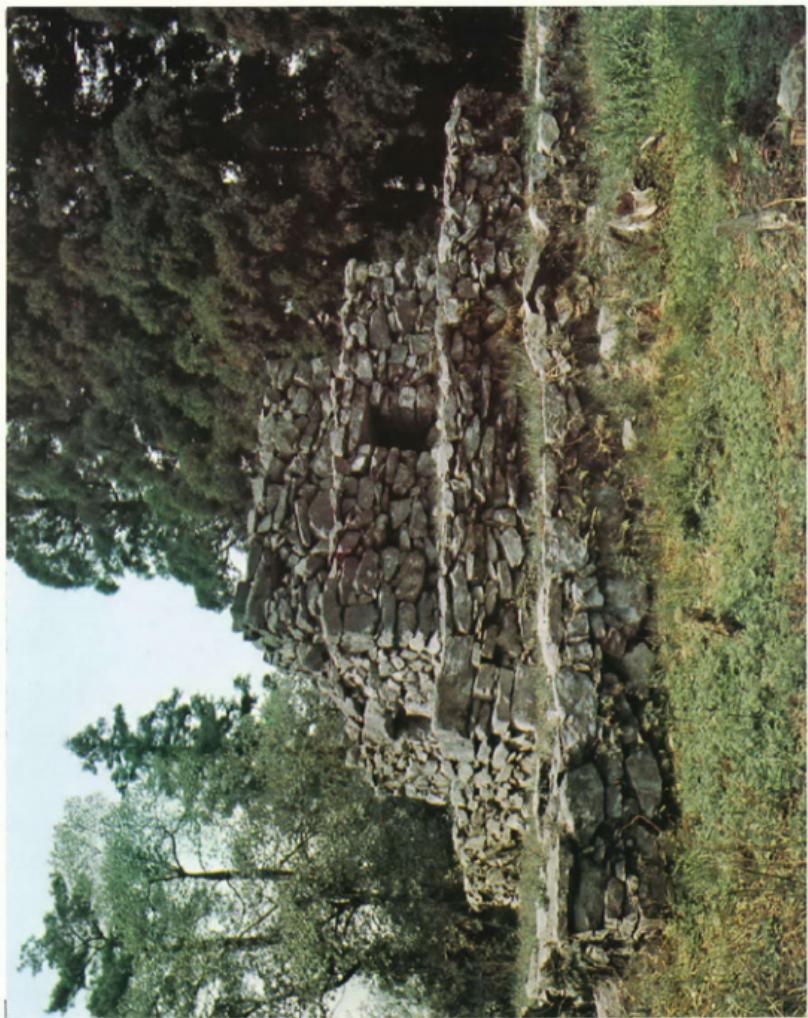
熊山町教育委員会

熊山遺跡

岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報

1974年3月

熊山町教育委員会



序

本町の南東、標高508mの熊山は、古来より神聖な山として崇められてきました。

この熊山山上にある「熊山遺跡」は、国の史跡に指定され17年余になりますが、最近いち
だんと石積西面の崩壊がすすみ歪みを生じてきたので、石積復旧修理の要望が強まつてき
ました。

また、「熊山遺跡」は特殊な三段方形の石積を中心とする史跡ですが、その石積の性質も
明らかでなく、謎の石積とされてきました。

このたび、文化庁の指示により、国・県の補助金を得て、石積復旧修理を前提とした緊急
発掘調査の実施が決定され、ここに地主および地元民の方々の理解と協力により、一連の
調査が実施されたことは、まことに意義深く喜びに堪えないところであります。

このたびの調査によって、熊山連山に分布する石積遺構の状況が明らかになるとともに
国指定石積の解明の手がかりの一端がつかめ、今後の研究資料として活用されるよう期待
するところが大であります。

ここにようやく調査の報告書がまとまり、調査の概要を公にすることになりましたが、
直接指導助言をいただいた奈良国立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部、坪井部長・牛川
技官、岡大近藤教授をはじめ専門研究者各位ならびに調査実施に格別のご理解とご尽力を
おこなった地元各位に対し、感謝の念を捧げ序文とします。

1974年3月

熊山町長 實 盛 勇

例　　言

1. 本書は、文化庁の指示により、熊山町教育委員会の組織した、史跡「熊山遺跡」緊急発掘調査委員会が、1973年（昭和48年）9月から1974年（昭和49年）1月にかけて実施した岡山県赤磐郡熊山町に所在する「熊山遺跡」に関する調査報告書である。
2. 国指定石積の写真実測は奈良国立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部、計測修景調査室が担当し、国化は奈良国立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部の指導のもとに、アジア航測株式会社が行なった。
3. 石積造構の分布調査に際しては、備前市、瀬戸町、和気町の地元各位の協力を得た。
4. この報告書の執筆および編集は、坪井清足、牛川喜幸、角田茂、難波俊成、正岡睦夫、真野義一が担当した。
5. 出土遺物の整理・実測・記載ならびに分布調査における各石積の略図は、角田茂、正岡睦夫が担当した。
6. 写真的撮影および編集は、角田茂、正岡睦夫、真野義一が担当した。
7. 本書に掲載してある関連石積の図は、正確な実測によるものでなく見取りの略図である。

熊山遺跡

岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報

目 次

	頁
第一 章 調査の経過	1
I はじめ	1
II 調査目標	3
III 経過	3
第二 章 熊山の地理的景観	9
第三 章 国指定石積の写真測量	11
I 調査目的および期間	11
II 実測調査方法	11
III 成果	16
第四 章 トレンチ調査	18
I Aトレンチについて	18
II Bトレンチについて	18
III 遺物	19
IV 「鐘楼跡」について	24
V 墓状遺構について	25
第五 章 石積遺構分布調査	26
I はじめ	26
II 各遺構の概要	27
III 調査を終えて	38
第六 章 まとめ	44
I 石積遺構の実測	44
II 石積遺構東側の発掘調査	45
III 分布調査	45
付 參考文献目録	47

図版目次

- グラビア 「熊山遺跡」石積遺構 南東から
- 図版第1, (1)熊山遺跡、石積遺構 東から (真野撮影)
(2)熊山遺跡、石積遺構 南から (真野撮影)
- 図版第2, (1)国指定石積遺構、壺 東から (真野撮影)
(2)国指定石積遺構、壺 南から (真野撮影)
- 図版第3, (1)国指定石積遺構、壺 西から (真野撮影)
(2)国指定石積遺構、壺 北から (真野撮影)
- 図版第4, (1)国指定石積遺構出土、陶製筒形容器 (近江撮影)
(2)陶製筒形容器、壺 (部分) (近江撮影)
- 図版第5, (1)熊山遺跡 (真野撮影)
(2)熊山遺跡からの遠望 (南) (真野撮影)
- 図版第6, (1)「雛櫻跡」石列北から (真野撮影)
(2)鬼面瓦全景北から (真野撮影)
- 図版第7, (1)AトレンチW-2区平瓦出土状況 (真野撮影)
(2)史跡内埴状遺構東から (真野撮影)
- 図版第8, 出土瓦 (正岡撮影)
- 図版第9, (1)龍神山1号(行者塚)石積遺構(B₁) 南から (角田撮影)
(2)南山崖1号石積遺構(C₁) 南から (角田撮影)
- 図版第10, (1)南山崖2号石積遺構(C₂) 南から (角田撮影)
(2)南山崖3号石積遺構(C₃) 西から (真野撮影)
- 図版第11, (1)南山崖3号石積遺構(C₃) 北東から (真野撮影)
(2)南山崖3号石積遺構 壺 東から (真野撮影)
- 図版第12, (1)南山崖4号石積遺構(C₄) 南東から (真野撮影)
(2)南山崖5号石積遺構(C₅) 東から (真野撮影)
- 図版第13, (1)経盛山1号石積遺構(D₁) 北東から (真野撮影)
(2)風神山1号石積遺構(E₁) 南から (真野撮影)
- 図版第14, (1)風神山2号石積遺構(E₂) 東から (角田撮影)
(2)風神山3号(殿治神崩)石積遺構(E₃) 南東から (角田撮影)
- 図版第15, (1)南の峰1号石積遺構(F₁) 南東から (真野撮影)
(2)南の峰2号石積遺構(F₂) 西から (真野撮影)
- 図版第16, (1)南の峰3号石積遺構(F₃) 南から (真野撮影)
(2)南の峰4号石積遺構(F₄) 南から (真野撮影)
- 図版第17, (1)南の峰5号石積遺構(F₅) 南西から (真野撮影)
(2)南の峰7号(美音院跡)石積遺構(F₇) 東から (真野撮影)
- 図版第18, (1)南の峰8号石積遺構(F₈) 南から (真野撮影)
(2)大谷山1号石積遺構(G₁) 東から (真野撮影)
- 図版第19, (1)高津山南1号石積遺構(H₁) 北西から (真野撮影)
(2)山頂三角点1号石積遺構(I₁) 南から (角田撮影)
- 図版第20, (1)丸八山1号(虎の巣)石積遺構(J₁) 東から (真野撮影)
(2)獅子が谷1号石積遺構(K₁) 西から (糸原撮影)
- 図版第21, (1)獅子が谷2号石積遺構(K₂) 西から (糸原撮影)
(2)丸下山1号(犬の墓)石積遺構(L₁) 東から (中力撮影)
- 図版第22, (1)鳥帽子岩1号石積遺構(M₁) 南から (今田撮影)
(2)千鉢行人山石積遺構(O₁) 東から (真野撮影)

- 図版第23, (1)千軒明人山石積遺構 (O₂) 南から (真野撮影)
 (2)板根竈神様石積遺構 (O₂) 東から (真野撮影)
- 図版第24, (1)香登宮山石積遺構 (O₄) 南から (真野撮影)
 (2)勢力登上山石積遺構 (参考地N₅₈) 東から (末撮影)
- 図版第25, (1)珠千姫地区石積遺構 (参考)

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 写真測量の原理……………	(平城宮跡発掘調査部, 作成) 11
第 2 図 ①写真測量用カメラ SMK40…	(平城宮跡発掘調査部, 撮影) 12
②図化機ステレオメトログラフ	(平城宮跡発掘調査部, 撮影) 12
第 3 図 基準点および撮影点配置図…	(平城宮跡発掘調査部, 作成) 13
第 4 図 撮影作業……………	(平城宮跡発掘調査部, 撮影) 14
第 5 図 対写真……………	(平城宮跡発掘調査部, 撮影) 14
第 6 図 石積遺構周辺地形図……	(平城宮跡発掘調査部, 実測, 作成) 15
第 7 図 石積遺構平面図……	(平城宮跡発掘調査部, 実測, 作成) 挿頁 1
第 8 図 石積遺構東立面図……	(平城宮跡発掘調査部, 実測, 作成) 挿頁 2
第 9 図 石積遺構西立面図……	(平城宮跡発掘調査部, 実測, 作成) 挿頁 3
第 10 図 石積遺構北立面図……	(平城宮跡発掘調査部, 実測, 作成) 挿頁 4
第 11 図 石積遺構南立面図……	(平城宮跡発掘調査部, 実測, 作成) 挿頁 5
第 12 図 石積遺構断面図……	(平城宮跡発掘調査部, 実測, 作成) 挿頁 6
第 13 図 石積遺構模式図……	(平城宮跡発掘調査部, 実測, 作成) 17
第 14 図 Aトレント土層断面図 (正岡・真野実測, 正岡製図) ……	挿頁 7
第 15 図 Bトレント土層断面図 (正岡・真野実測, 正岡製図) ……	挿頁 8
第 16 図 熊山遺跡出土遺物実測図 (正岡, 実測・製図) ……	20
第 17 図 熊山遺跡出土瓦実測図 (正岡, 実測・製図) ……	22
第 18 図 W-2区出土瓦実測図 (正岡, 実測・製図) ……	23
第 19 図 鉄釘実測図 (正岡, 実測・製図) ……	24
第 20 図 塵状遺構実測図 (正岡・角田・榎原・本原実測, 正岡・本原製図) ……	25
第 21 図 南山崖 6号 (C ₆)出土土器実測図 (正岡, 実測・製図) ……	29
第 22 図 尺八山1号 (J ₁)出土遺物実測図 (正岡, 実測・製図) ……	34
第 23 図 K地区寺院跡出土瓦実測図 (正岡, 実測・製図) ……	35
第 24 図 千軒明人山 (O ₂)出土備前焼実測図 (正岡, 実測・製図) ……	37
第 25 図 大通山地区石積分布地……………	42
第 26 図 名石積遺構略図 (角田, 作成) ……	挿頁 9
第 27 図 熊山の地形および石積遺構分布図 (角田・真野, 作成) ……	挿頁10

付 表 目 次

	頁
付 表 1 石積遺構分布状況.....	38
付 表 2 雄山山塊石積遺構群一覽表.....	40

第一章 調査の経過

I はじめに

岡山県赤磐郡熊山町の南東、標高 500m の熊山山上に残る『熊山遺跡』は、昭和31年9月27日国の指定を受けた、三段の方形石積遺構を中心とする史跡である。

しかし、空撮のため破壊された石積遺構の西側一面の崩壊が進行し、石積遺構全体としても歪みが生じ、全面にわたって崩壊するおそれがあるため、管理者である熊山町は、所有者熊山神社総代会と相談し、石積遺構復旧修理の申請をつづけてきた。

昭和47年度において、国費30万円、県費10万円の補助を受け、総額60万円で案内板の作成、注意札、四極等の環境整備を実施した。

ひきつづき、昭和48年度においては、石積復旧修理を前提とした緊急発掘調査を実施するようにとの文化庁の指示により、国からの補助金 225万円、県からの補助金75万円、総額 450万円をもって、調査を実施することになった。

昭和48年9月13日、熊山町会において「史跡熊山遺跡緊急発掘調査委員会」が組織され、第一回の会合が開かれた。

熊山町教委から、石積復旧修理を前提とした調査方針が示され、協議の結果、

1. 国指定史跡内の石積遺構写真測量および図化
 2. 史跡内のトレンチ調査
 3. 史跡「熊山遺跡」に隣接する石積遺構分布調査
- を目的とした調査を実施することに、意見の一致をみた。

調査は1973年（昭和48年）9月17日から約4ヶ月の予定で行なわれた。

「史跡熊山遺跡緊急発掘調査委員会」の編成はつきのとおりである。

委員長　　寅盛　勇　（熊山町長）

副委員長　近藤　義郎　（岡山大学法文学部教授）
兼専門委員

副委員長　吉原　貞郎　（熊山町教育委員会教育長）

副委員長　岡田　政敏　（岡山県教育次長、文化課長）

専門委員　坪井　清足　（奈良國立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部長）

牛川　喜幸　（奈良國立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部）

伊東 太作	(奈良國立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部)
田中 哲雄	(奈良國立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部)
佃 幹雄	(奈良國立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部)
角田 茂	(赤磐郡瀬戸中学校教諭)
難波 俊成	(近畿大学講師)
吉房 信夫	(熊山町文化財専門委員長)
 委 員	
水川富貴男	(岡山県教育庁文化課課長補佐)
浅原 健	(岡山県教育庁文化課文化財主幹)
中力 昭	(岡山県教育庁文化課文化財保護主事)
正岡 雄夫	(岡山県教育庁文化課文化財保護主事)
大橋 義則	(岡山県教育庁文化課主事)
小原 孝	(岡山県教育庁文化課主事)
大橋 一男	(熊山町勤役)
藤本 力	(熊山神社代表総代)
入矢渡土吾	(熊山町文化財専門委員)
岡崎 圭太	(熊山町文化財専門委員)
森定 憲太	(熊山町文化財専門委員)
藤森 晴人	(熊山町文化財専門委員)
 監 事	
土井 易雄	(熊山町文化財専門委員)
野波 能一	(熊山町役場総務課長)
 幹 事	
真野 義一	(熊山町教育委員会社会教育主事)
 会 計	
西沢 幸男	(熊山町役員)
国平 順好	(熊山町教育委員会学事係長)

調査にあたり、奈良國立文化財研究所の特別のご配慮により、調査委員会に参加していただいた、平城宮跡発掘調査部部長坪井清足氏をはじめ、牛川喜幸氏を中心とする写真実測班の諸先生に感謝の意をさしきたい。また、三輪嘉六(文化庁技官)、田中 琢(文化庁技官)両氏の現地来訪を得、多大のご指導と助力をえた。さらに大場磐雄氏(國學院大學客員教授)、近江昌司氏(天理大学附属参考館)その他諸氏の視察と助言を得た。

なお、石横造構分布調査期間中には、岡山大学考古学教室の学生諸氏および和気賀谷高校、備前美校の生徒諸君の助力をえた。

また、遺跡所有者熊山神社総代会、奥吉原区長川辺豊一氏、熊山神社社務所瀬見ご夫妻、梶田宝氏ら地元

の方々、榎原清馬氏、石原秀一氏、今田利輔氏ら東備史談会の諸氏をはじめ、献身的に分布調査に助力をいただいたの方々、とりわけ入山について理解と協力を示された地権者ならびに岡山営林署など諸氏に深い感謝をささげるしだいである。

II 調査目標

このたびの調査は、崩壊しかかっている石積遺構を復旧修理するための資料収集を主目標とするものである。しかしながら史跡が施寺帝釈山靈山寺の境内に位置するため、「鐘楼跡」、「觀音堂跡」と伝承されている地域が含まれている。そのために具体的目標として、

(1) 写真測量および図化

石積遺構復旧修理のために正確な実測図を作成する必要から、石積遺構各面の縮尺 $1:50$ の立面図ならびに平面図を作成する。

(2) トレンチ調査

石積構築成時の手がかりを調査するとともに、靈山寺跡の遺構の広がりを確認し、今後の環境整備の参考に資するために、「鐘楼跡」を中心に、東西18m、南北18.5mに幅1mのトレンチ各1本を掘削する。

(3) 熊山金山にわたる石積遺構分布調査

国指定石積遺構と類似する大小の石積遺構が、熊山連山に3~30数基あると言われているが、その分布状況、規模等については綿密な調査がなされてなく不明であった。それ故に、国指定石積遺構を中心として、東西約7km、南北約6.5kmにわたってその分布状況を調査し、その数、規模等を確認するとともに、国指定石積遺構との関連を調査する。

III 経過

調査日程を立案するにあたり、石積遺構分布調査は、松葉山の関係から、入山許可での11月から約2か月間の予定で調査することにし、それに先だって、写真測量作業、トレンチ調査を実施する計画とした。

1. 調査準備

昭和48年9月17日

器材運搬。器材保管場所として熊山神社社務所を借用。写真測量、トレンチ調査のための除草作業開始。史跡の境界線の伐採。

9月19日~21日

石積遺構周辺を中心とした除草作業。石積遺構の南側に長さ約30mの石垣があらわれる。

9月22日

写真測量のための木材、パイプやグラ等の運搬。

9月25日～27日

石積遺構周辺の除草作業にひきつき落葉、腐植土の除去作業を続行。石積遺構の西方に岩盤が露出していたが、腐植土の除去により、各方面に岩盤露出。大岩盤の上に石積が築造されていることが判明。形も一段と大規模に見える。

9月28日～29日

「鐘楼跡」の南の段。一段と低位になっている場所の清掃。「鐘 楼 跡」へ通ずる幅10m、7段の石壁が、清掃によって現われる。



2. 写 真 測 量

10月 1日

奈良県立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

牛川喜幸氏ら4名来町。熊山町舎にて写真測量日程の細部について打合せ。

10月 2日

写真測量の器材運搬。撮影のための原点設定。基準杭（№1・№2）の埋設作業およびポイント設定作業。

10月 3日

原点（№1杭）の海拔高度測定。№1杭＝海拔 437.274m。石積遺構南側石垣堆積土の除去作業。



〈写真②〉 国指定石積 写真測量作業

10月 4日

基準杭、№3、№4の埋設作業。各ポイント間の距離測定。

10月 5日

石積遺構周辺の平板測量作業。

10月 6日～9日

写真測量作業、石積の各面の撮影、ひきつづいて南側石垣および階段の撮影。

10月10日

パイプやグラ、木材等の器材撤去作業。

3. ト レン チ 調 査

10月11日

熊山遺跡発掘調査専門委員会。

現地熊山山上において、雨の中でトレンチ調査の方法、範囲について検討会。

10月13日

トレンチ調査の原点を、写真測量No.1杭を使用し、「鐘櫛跡」でクロスするようにトレンチ設定。

10月15日

石積遺構の東側広場の調査の実施。「鐘櫛跡」の部分の除草。完全に清掃したのち写真撮影。15日ひきづき、トレンチ調査のための割りつけ。

10月16日

トレンチ調査

E-3, 4区, W-1, 2区 N-1, 2, 3区, S-1, 2, 3区掘下げ作業、表土下のやや明るい黄褐色土層には少量の瓦と土器片が全域に含まれている。S-3区下層の灰色土で、土器片を比較的多く含んでいる。また、同層から糞目平瓦片を検出した。

10月19日

トレンチ調査続続

各トレンチの残りの部分を下層まで掘り下げる。W-1, 2区下層に瓦を多量に出土した。

10月20日

除草作業によって確認された墳状遺構の平板実測。トレンチの清掃と写真撮影。トレンチ断面の撮影準備、水糸の設置と土層区分を行なう。

10月22日

トレンチ断面の清掃と写真撮影および断面実測調査の実施。E-2, 3区で一部を掘り下げる。

10月23日

天理大学附属参考館、近江昌司氏視察。

10月26日

文化庁技官三輪嘉六氏、国学院大学客員教授大場磐雄氏岡山大学名誉教授、藤井駿氏ら視察。

11月2日

熊山遺跡発掘調査専門委員会（トレンチ調査について現地検討会）

トレンチ調査の一部補足調査の実施。瓦のとりあげ作業。ひきづいて、東西トレンチの北壁の実測を一部補足する。



〈写真③〉 トレンチ調査作業

4. 石積遺構分布調査

11月4日～7日

岡山県赤磐郡瀬戸町弓削地区内における石積遺構分布調査。

南山崖を中心として、遺構が密集しており、国指定の石積と同規模の遺構が確認される。石積遺構周辺に落葉及び雑木が生え茂り、清掃に時間要する。

※11月9日

分布調査のために山上に登るも、小雨となり調査不能。作業を変更しW区およびS区のトレンチ埋めもどし。

11月10日～11日

瀬戸町弓削地区の経盛山を中心として、石積遺構分布調査。

※11月12日～14日

トレンチ埋めもどし作業（N区およびE区）。史跡地内石段西側の崩れた個所の清掃および圍柵の補修。パイプやグラ、角材、テントの返却ならびにトレンチ調査地域のあと片付け。

※11月17日

史跡地内全域にわたって平板測量。

11月18日

本日より赤磐郡熊山町内の石積遺構分布調査を実施する。

比較的低地に存在する石積遺構2基を確認。完全に破壊されている千躰地内の一基から、土器片2を採集する。

11月21日～25日

熊山国有林内、板場池から舟下山を中心して踏査する。深山であり、かつ近年人の入山した形跡はない。特に谷間においてはシダ類が繁茂し、方位が定まりにくい。

板場池の北方に「犬の墓」と通称されてい る石積遺構があるが、盗掘のため、地山まで掘り下げられており規模不明。



12月1日

〈写真④〉舟下山1号（犬の墓）石積遺構、盗掘のあと

本日より和気郡和気町分布調査。熊山町との境界を中心に調査するも、遺構なし。

12月2日

瀬戸町南山崖頂上付近、聞き込みにより再調査。

12月3日～8日

和気町内の分布調査を続行。熊山連山の中でも特に急峻な山容であり、いたる所で岩盤が露出し急崖とな

っているため踏査困難。

石積遺構は報音堂遺跡の他は全くなし。

12月11日

備前市地域の石積遺構分布調査。地元の東備史談会の諸氏と具体的な調査日程について協議。全日程を約2週間とする。

12月13日～15日

本日より備前市区域の分布調査開始。岡大考古学教室の学生諸氏の協力を得る。美音谷を中心にして遺構は存在するが、ほとんどの遺構が破壊されており、また転用されているものも多い。

12月17日～24日

備前市香寺地区および伊部地区の分布調査。月末になると、山頂部に積雪があり、小径では歩行困難。

山頂部までの往復に時間がかかり、予定した日程では、消化が困難となる。備前高校、和気開谷高校郷土クラブの生徒諸君に調査協力を依頼、調査に参加してもらう。

備前市東部、伊部地区には石積遺構はほとんどない。しかし墓跡は高抜400mにも存在する。

12月25日～26日

瀬戸町南山崖地区再調査および備前市内調査

1974（昭和49年）1月8日

熊山遺跡緊急発掘調査委員会（調査検討会）を岡山博物館において開催。各調査担当者より調査結果について報告。検討のち、報告書作成の分担決定。

1月15日

和気町大中山地区において、地元からの石積遺構についての情報により確認調査。

1月26日～28日

和気町内および備前市内の再調査。備前市美音院跡遺構（筒形容器の出土したと伝承される遺構）についてヒアリング調査。

ここに、一部の地域の分布調査を残し、5か月間、実労70日にのぼる調査を終了した。

奈良国立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部の協力のもと、岡山県下では初の試みとして石積遺構の図化に写真測量の技術を応用し第7・8・9・10・11・12図のごとく、精度の高い図化に成功した。また、トレンチ調査、石積遺構分布調査についても数々の成果があがった。まずトレンチ調査では、つぎの結果が得られた。
①「鐵接跡」には2つの方形石列がみられ、一つのものは昭和初期のものであり、他のものも鎌倉時代以降の遺構であることが確認された。
②国指定石積遺構がつくられた時期には、東側に浅い谷状の地形があり岩盤が露出していたと思われる。岩盤上の遺構の有無については、小トレンチでは確認できないが、何も存在しなかった可能性が高い。
③鎌倉時代後半から南北朝初めに建造物があったことが確認されるとともに、下部から平安時代末ごろの須恵器、須恵土器、土師器、鉄釘の出土があった。もし全域の発掘を実施すれば石積遺構造成時の手がかりが得られるかも知れない。また、石積遺構の分布調査では、48箇所を踏査

し、確實またはほぼ確実とされたもの33基におよび、特に赤磐郡額戸町弓削の南山崖の石積造構では、規模も国指定石積と同規模であり、齒を有しているものとして注目された。

いずれにせよ、今回の調査は、あくまで「熊山遺跡」の一貌を明らかにしたにすぎず、歴の石積造構を中心とする「熊山遺跡」の全貌を明らかにするには、今後の調査をまたねばならない。

(文責・真野 義一)

第二章 熊山の地理的景観

熊山山塊は旧備前國中央やや東寄りに位置し、東西約7km、南北約6.5kmを測る。北と西は吉井川によつて限られ、南は新幹線・赤穂線・国道2号線の並走する狭長な平地により、東は和氣を経て片上港に達する片上鉄道の通ずる曲折した狭い谷によって限られている。標高は500mをこえ、備前中南部での最高峰である。

四面の裾はいずれも急峻で、とくに西側する最高地城から吉井川に落ちる大谷の斜面は、露岩のおびただしい急崖で、吉井川にかかる国道2号線の備前大橋方面より望見すると、いかにも雪山の感が深い。そのあたりは赤磐郡瀬戸町弓削ゆげに属している。南の備前市側と北の熊山町側は、いくつもの急な深い谷を形成しており、東の和気郡や気町側もほぼ同様である。標高350m附近から山上は傾斜が急に緩やかとなり、比較的大らかな小丘状の尾根尾根が複雑な様相を見せて八方へのびている。従って山上は高原状であるが、その中央部付近で、南北から開折の進んだ谷に侵入され、東西に分断されたように見える。東半部は西半部より若干仄く、最高地点も450m未満であるのに対し、西半部は広く尾根の張り出しある複雑で、500mをこえる小峰がさうに連している。この山上からの眺望はきわめて良好広大で、快晴時には、北は遠く中国脊梁山地、南は東瀬戸内海から四国連山を望見することができるといふ。

熊山の北麓を現在山陽線が走っているが、東西にのびるこの狭長な平地は、古代の官道である山陽道が通じていた部分であり、津山盆地東部で南下して熊山山塊に突き当たり、その裾を西から回りつついには児島湾に注ぐ吉井川は、古來水運に利用された川であつて、上述のように南麓を東西にのびる平地もまた、古今を通じて交通の要路に当たつている。そして、山麓のすぐ南東麓に向かっては、瀬戸内海のおぼれ谷である片上港が、東南東方向から深く突入しており、また南西麓の南方には、高山の小山塊をへだてて、長船および邑久千町の沃野が開けている。熊山は自然地形の面からみて、交通上の重要な結節部にわだかまっているともいえよう。

熊山の地質は、山頂(508.6m)付近から熊山町勢力・瀬戸町弓削北半にかけ吉井川に向かって扇状に広がる地城と、備前市側南西端(坂根地区)のみが、吉井川をこえて西方へのびる、粘板岩を主とする非変成の上部古生層であり、残るほとんどすべては、備前東部の広大な地域と同じく、中生代後期の火山岩であ



<写真③> 熊山より南へ吉井川を望む

る流紋岩質疊層岩類となっている。(1)

(文責・角田 茂)

註 (1) 光野千春 「岡山県地質図」 岡山県 昭和38年
大森尚泰

第三章 国指定石積の写真測量

I 調査目的および期間

この調査は、地上写真測量を応用して、熊山遺跡の現状の精密な記録保存用資料を得ることを目的とし、あわせて同遺跡修復に資するため熊山町の依頼により奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部 計測修景調査室が行なったものである。

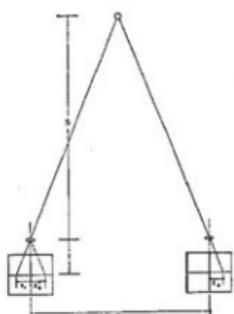
撮影は昭和48年10月2～9日に行ない、翌年1月に圖化および測定を行なった。

II 実測調査方法

実測調査は石積遺構を地上写真測量により、附近の地形は平板測量によって行なった。ここで地上写真測量の原理を簡単に説明する。

われわれが立体的な奥行きを感じたり、遠近を知ることができるのは、経験上遙いものほど小さく見えることを知っていることにもよるが、両方の眼が約65mmへだたった位置から物を見ているからである。このような実体感覚は、直接に肉眼で物を見ている時ばかりでなく、双眼鏡のような光学器械を通して観察する場合にも起る。

これはわれわれの目が単に自に入ってくる光線の最後の経路だけを認識するという性質をもつてゐるためである。したがって、左右に適当な間隔をへだてた2地点から撮影した2枚の写真を、右の眼で右の写真、左の眼で左の写真を読めることができたら、ちょうどカメラの位置に目をおいてながめるのと同じ感覚が得られ、しかも、この場合カメラの間隔は両眼の間隔より大きいから、実際に眼でながめるよりも立体感が一層誇張されて見えることになる。



第1図 写真測量の原理

写真測量はこの原理を使って誇張された立体像について測定を行なうのである。

地上写真測量では、適当な間隔（撮影基線）をへだててカメラを水平に位置し、平行に2枚の写真をとる。地上の点をX, Y, Z（Xは撮影基線、Yは奥行、Zは高さ）で表わすと、乾板面はX-Z面になり、カメラ軸はY方向に向く。たとえば第1図でSだけ離れた点にある物体を、焦点距離fのカメラでBだけ離れた位置で撮影したとすると、写真面にはそれぞれ画面の中心から x_1 , x_2 の位置にうつる。これから距離S

を $S = B f / x_1 + x_2$ で求めることができる。したがって、地上写真を使って位置を正確にきめようすれば、撮影に当たって 2 つのカメラ位置を水平かつ平行に据えることのほかに、焦点距離、撮影基線が正確にきめられなければならない。また小さい乾板に縮写された映像をもとにして測定するのであるから、レンズのわずかな収差も誤差の原因になるし、乾板面の凹凸や伸縮も、乾板面がレンズ軸に正確に垂直になっているかどうか、ということも精度に大きな影響を与える。このため写真測量には特殊なカメラ（第2図-①）・図化機（第2図-②）を必要とするが、しかし写真測量を応用すれば、作業が迅速で、精度にむらがなく、また乾板を保存する限り必要に応じていつでも撮影時の状態を再現できることなどの利点がある。

今回の作業は（a）投影面の設定、（b）撮影点の決定、（c）基準点の設置およびその計測、（d）撮影、（e）図化・測定の順序で行なった。以下各作業について述べる。

a 投影面の設定

先にのべたとおり、写真測量では適当な間隔（撮影基線）をおいてカメラを水平に整置し、平行に 2 枚の写真をとる。この写真をもとに図化を行なうのであるが、出来上った図は撮影基線を含む鉛直面への正射投影図となる。したがって、立面図を作成するためにはまず投影面を決定しなければならない。

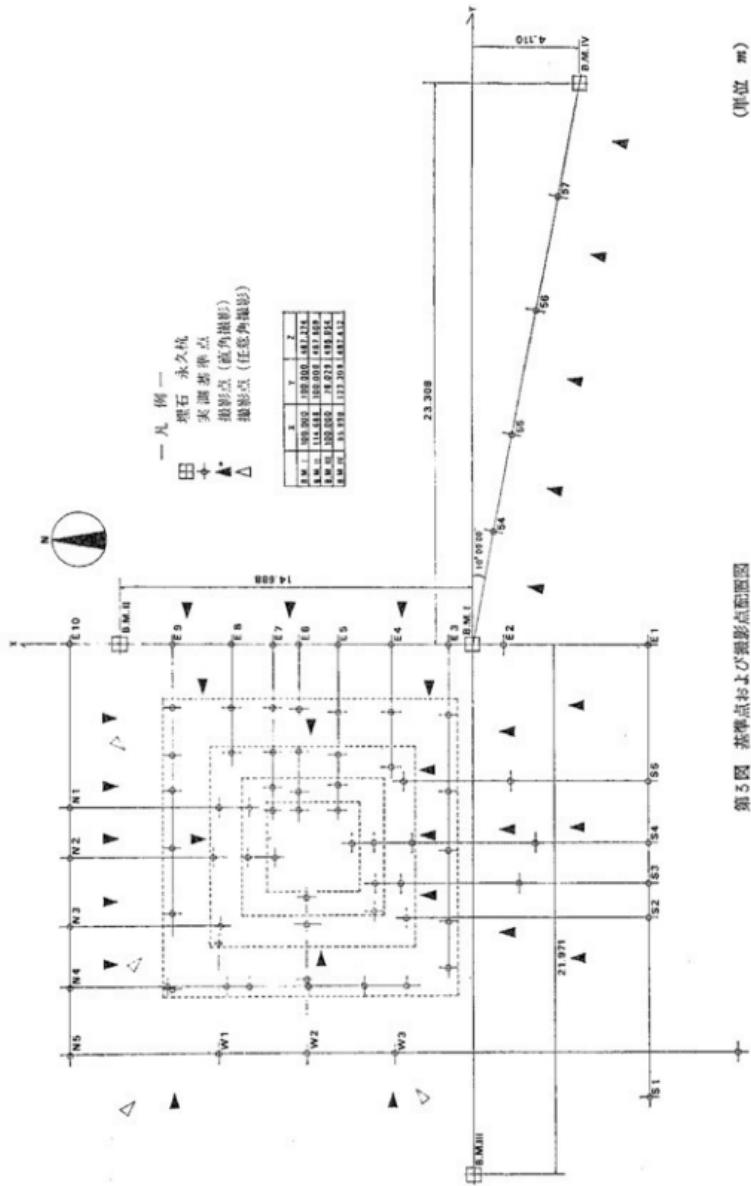
4 段で構成される石積造構の各段における直角度、段毎のねじれが分かる平面図がない段階で、投影面をどう設定するか、技術的に議論の分かれれる所であったが、結局、最長辺を持つ最下段で、しかも比較的石積の面がそろっている南辺に平行な面を投影面とし、他の面は、これを基準にそれぞれ平行または直交するように設定した。これらの投影面は後述する基準点からいつでも再現できる。



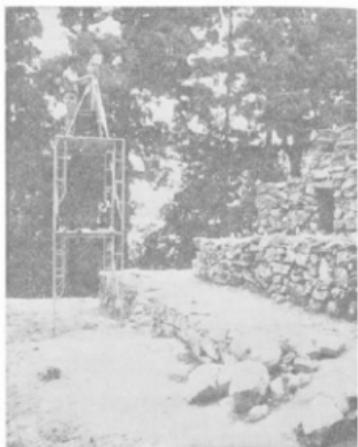
第2図-① 写真測量用カメラ SMK40



第2図-② 図化機 ステレオメトログラフ



第5圖 基準点および撮影点配置図



第4図 撮影作業

前述した投影面に平行及び直交する面で第3図に示した▲印に撮影点を定めた。ただ図中△点は、他の点からの死角を補うため平面圖作製用に、投影面に対し任意の角度で撮影した点である。なお一部の撮影点では棒を用い、カメラの高さを地上 5.5m の高さに設定し、死角を出来るだけ少なくするよう努めた。

c 基準点の設置および計測

図化測定は東独 Zeiss 社製ステレオメトログラフ E 型で行なった。この図化機の機構を簡単に云えば、投影器に乾板をのせ、その後方より光を送って現地と同じような光模像をつくり、この光模像について測定を行なうのである。したがって、測定精度を高めようとすれば、ここにできる光模像は実際の対象物の正確な縮図でなければならない。そこで2つのカメラの関係位置や、各方向から行なう測定の関係をつけるため、あるいは正確な縮尺をきめるためなどの目的で基準点を設置する必要がある。今回は、1モデルの乾板に最低3個の基準点が入るよう、計58点の基準点を設けた(第3図)。図化に先立ち、これらの基準点の位置を



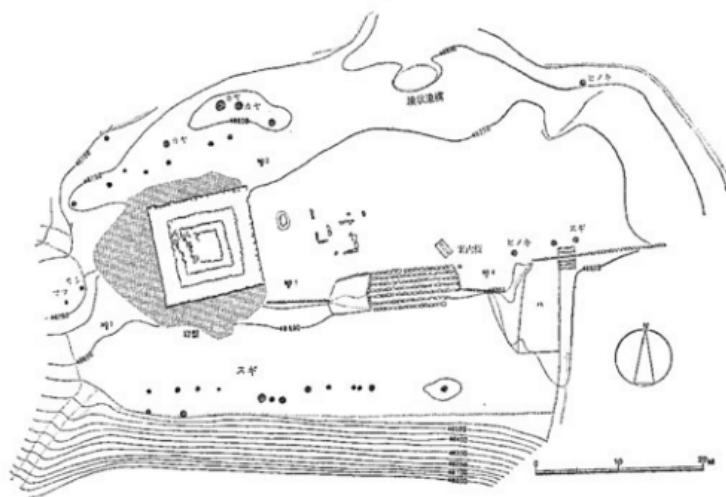
第5図 東立面図用対写真

適当な縮尺で図紙に展開しておき、写真から測定して得られた点と、どの程度よく一致しているかによって図全体の正確さを知ることができるし、また所望の精度になるまで図化機の校正を行なうよりどころとなるものである。そのため、その測定には細心の注意をもってあたり、精度を高める必要がある。今回は1秒

読みのセオドライトと鋼巻尺、およびレベルで直接計測し、その精度は±1.0mm、また標準精度は図上で±0.1mmにおさめた。なお投影面設定に際し基準面とした南面最下段に平行な2点、BM I、II、およびそれに直交するBM III、さらに石積造構に隣接する石垣および階段に平行した基準点BM IV（BM IとBM IIを結ぶ線が石垣に平行である）を設け、それぞれコンクリート杭を埋設した（第5図）。なお、使用した乾板約15ダースであったが、このうち図化、測定に使用したのはその約半分である。石垣および階段については基準点を設置し、撮影も行なったが今回図化までには至らなかった。

d 地形化

先に述べたとおり図化・測定には東独 Zeiss 社製ステレオメトログラフ E型を使用した。この器械は構造上Y軸とZ軸の切換えが出来るので、垂直に撮影された地上写真を用いる場合、一定の高さの水平面で切った断面線（地図の等高線と同じ）を描く事も出来るし、撮影基線に平行な船底断面線を描く事も出来る。立面図では石積は輪郭線で、岩盤部分は20cm間隔の船底断面線で描画し、平面図は20cm（岩盤部分は10cmの間曲線を入れる）間隔の水平断面線（等高線）で図化した。なお、平面図は水平写真による図化であり、普通の平面図では表現しないオーバーハングで隠される部分も図に示した。そのため第7図に示した如くやや雑種ではあるが5種類の線を用いてすべてを表示した。また測定座標値により、東西、南北断面図をもあわせて図化した。なお、周辺の地形は別に平板測量で行ない、石積部分は等高測量による平面図を縮小合成した（第6図）。



第6図 石積造構周辺地形図

III 成 果

今回の成果品は

1. 周辺地形図 縮尺1/200 (等高線間隔50cm) (第6図)
2. 石積平面図 縮尺1/20 (等高線間隔20cm) (第7図)
3. 東立面図 タ (第8図)
4. 西立面図 タ (第9図)
5. 北立面図 タ (第10図)
6. 南立面図 タ (第11図)
7. 断面図 (東西、南北断面) タ (第12図)

である。

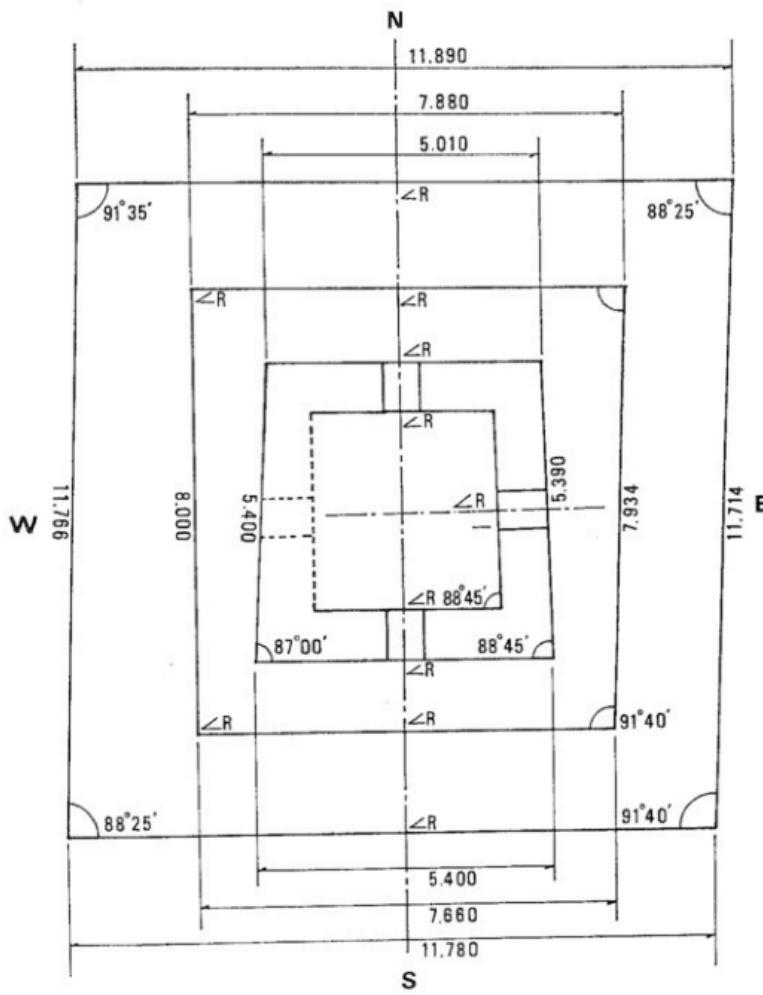
成果は図版に示した通りであるが、ただ平面図について多少の検討を加えた結果の概略について述べておく。

今回実測の基準とした石積造構の南面最下段東西線を基準線とし、各面の微小な凹凸を無視した場合、

1. 南面は2段目、3段目とも平行で、テラスの幅は1.83m、1.3mである。
2. 北面最下段、2段、3段、4段とも基準面に平行で、テラスの幅はそれぞれ1.92m、1.27m、0.90mである。
3. 東面の最下段と2段目は互いに平行で、基準面となす角はほぼ $91^{\circ}40'$ であり、その幅は、1.95m、また3段目と4段目も互いに平行で基準面となす角はほぼ $88^{\circ}45'$ で幅は0.90mである。
4. 西面については、最下段が基準面と $88^{\circ}25'$ 、2段目が $90^{\circ}00'$ 、3段目が $87^{\circ}00'$ である。
5. 3段目にある窓のそれぞれの中心線を引き通した場合、南北線は基準面と直交し、東西面は $1^{\circ}15'$ 、東で北へ振ると推定される。なお南北線と西北とのなす角は北で西へ $10^{\circ}30'$ 振れる。
6. 3段目のテラスの幅はすべて0.90mであり、それは南、北、東に残る龜の奥行きに一致する。

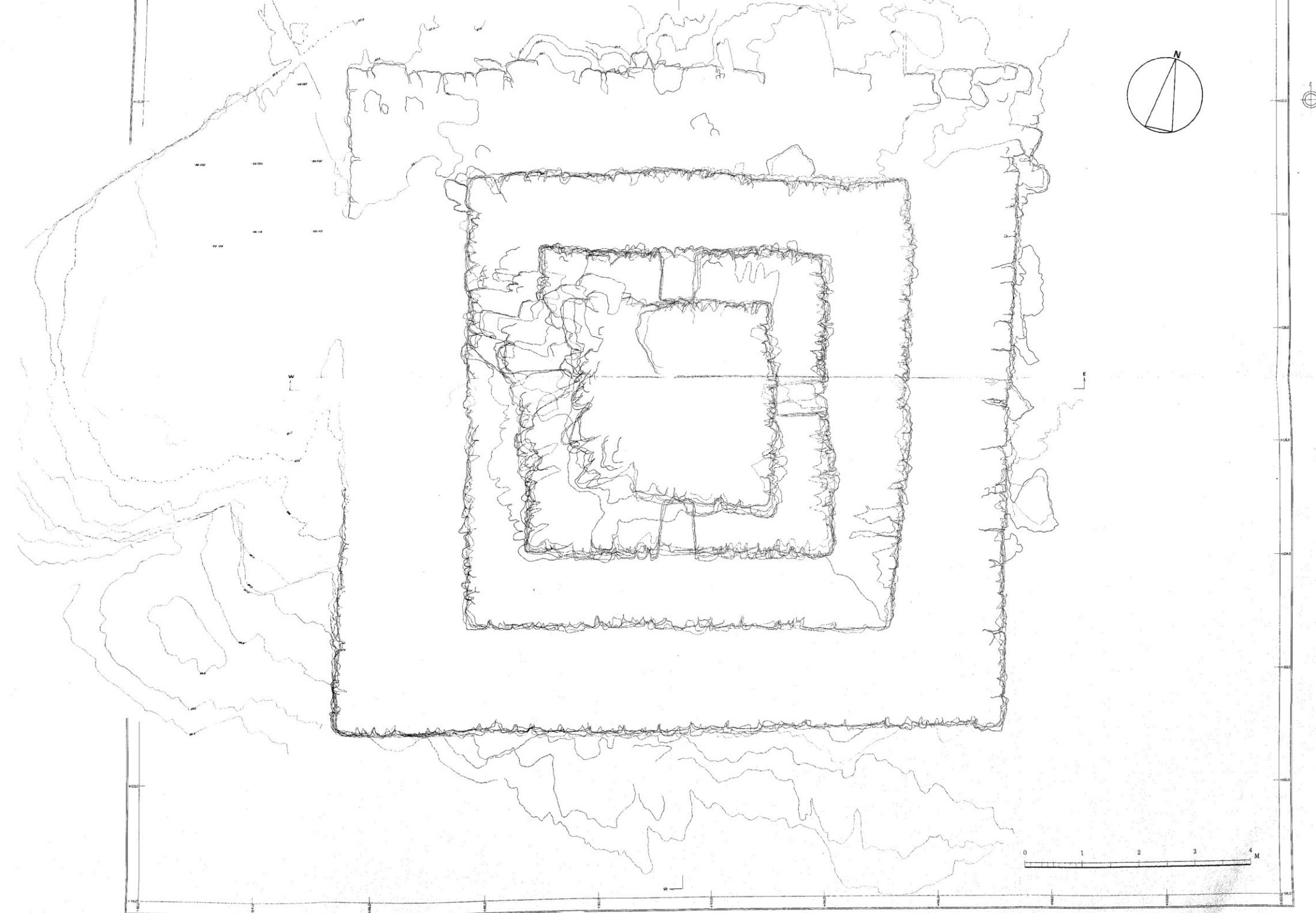
ということが云える。第13図はそれを模式的に示したものである。

(文責・牛川喜幸)

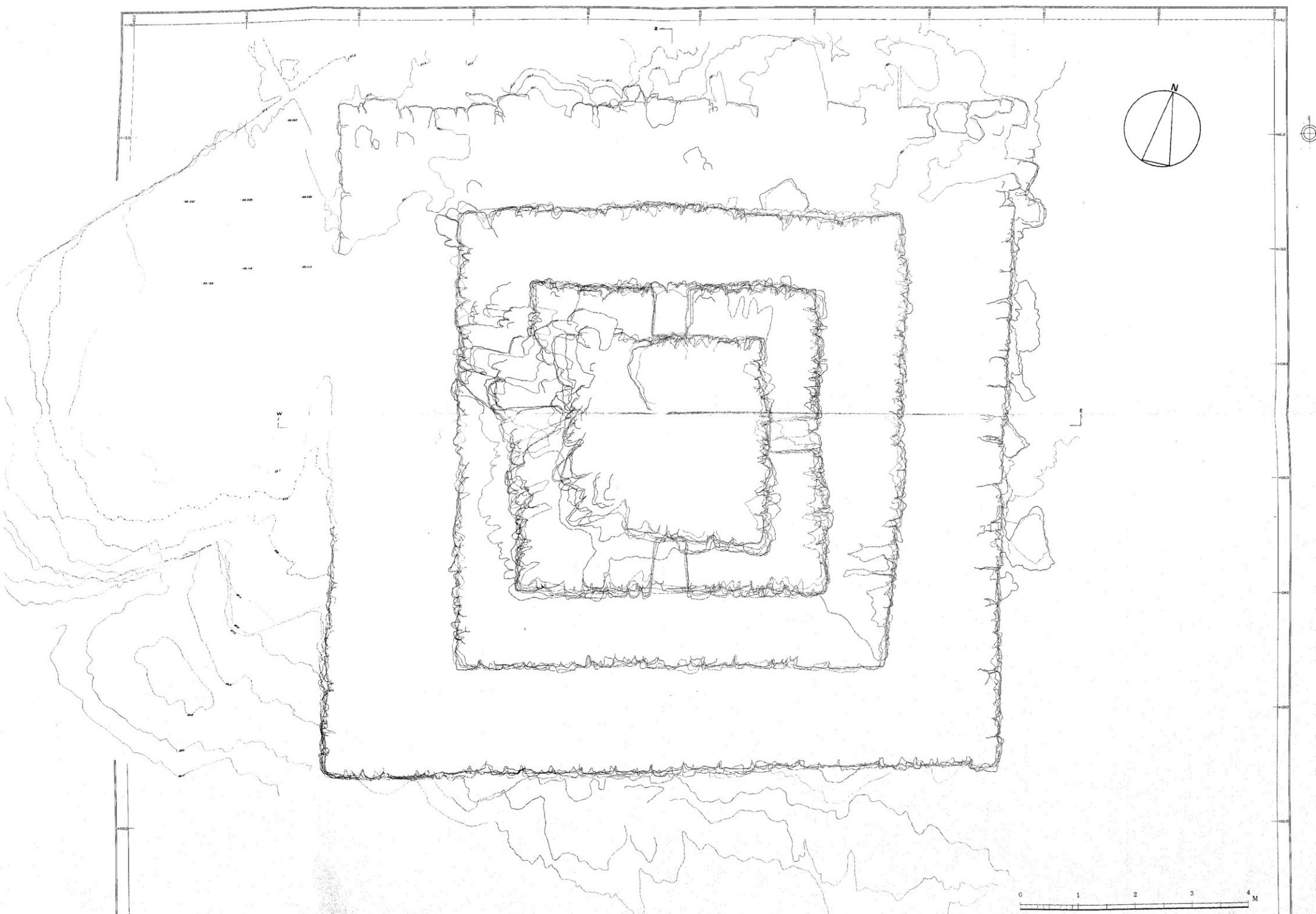


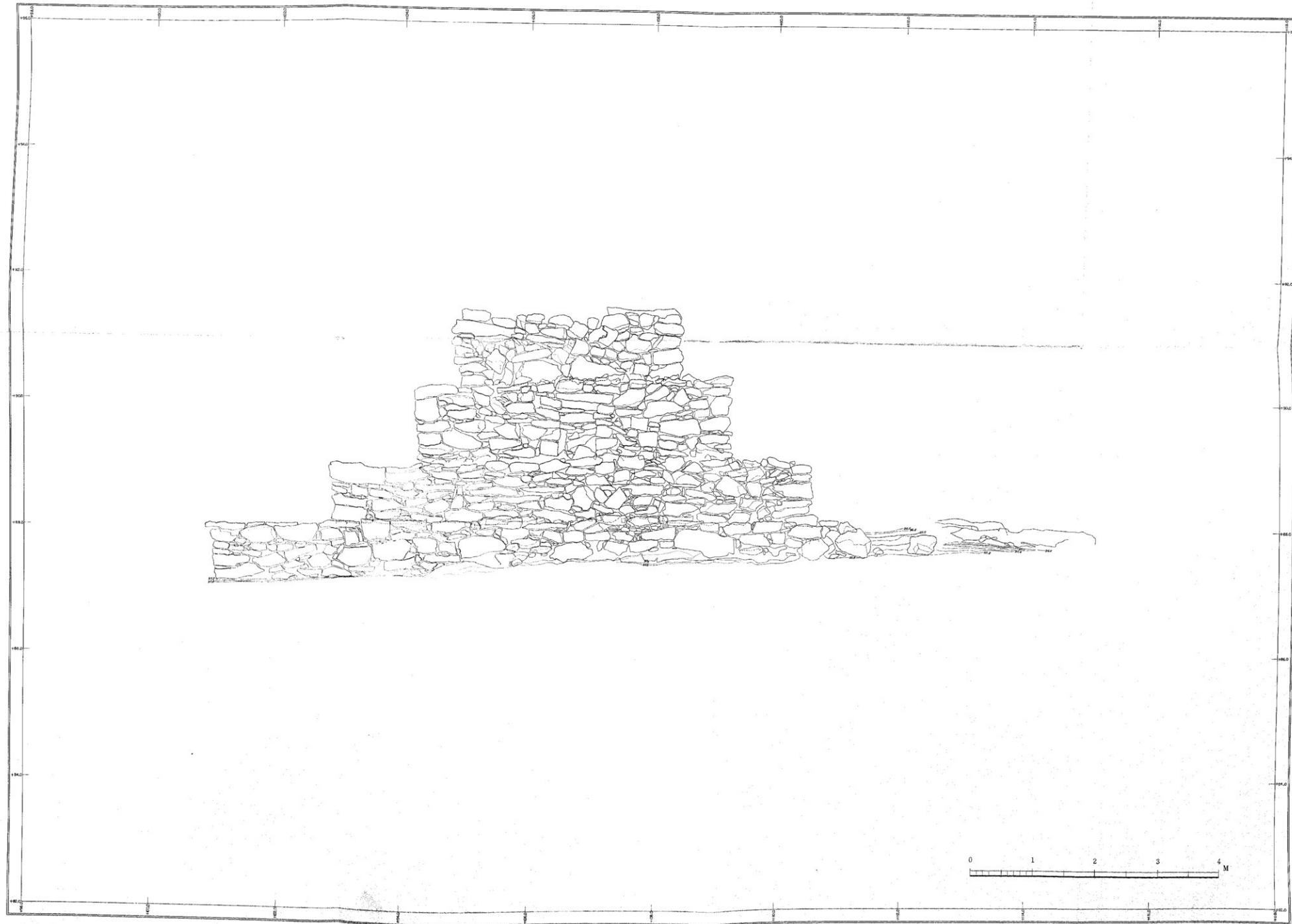
第13図 石積造構模式図

(単位 m)

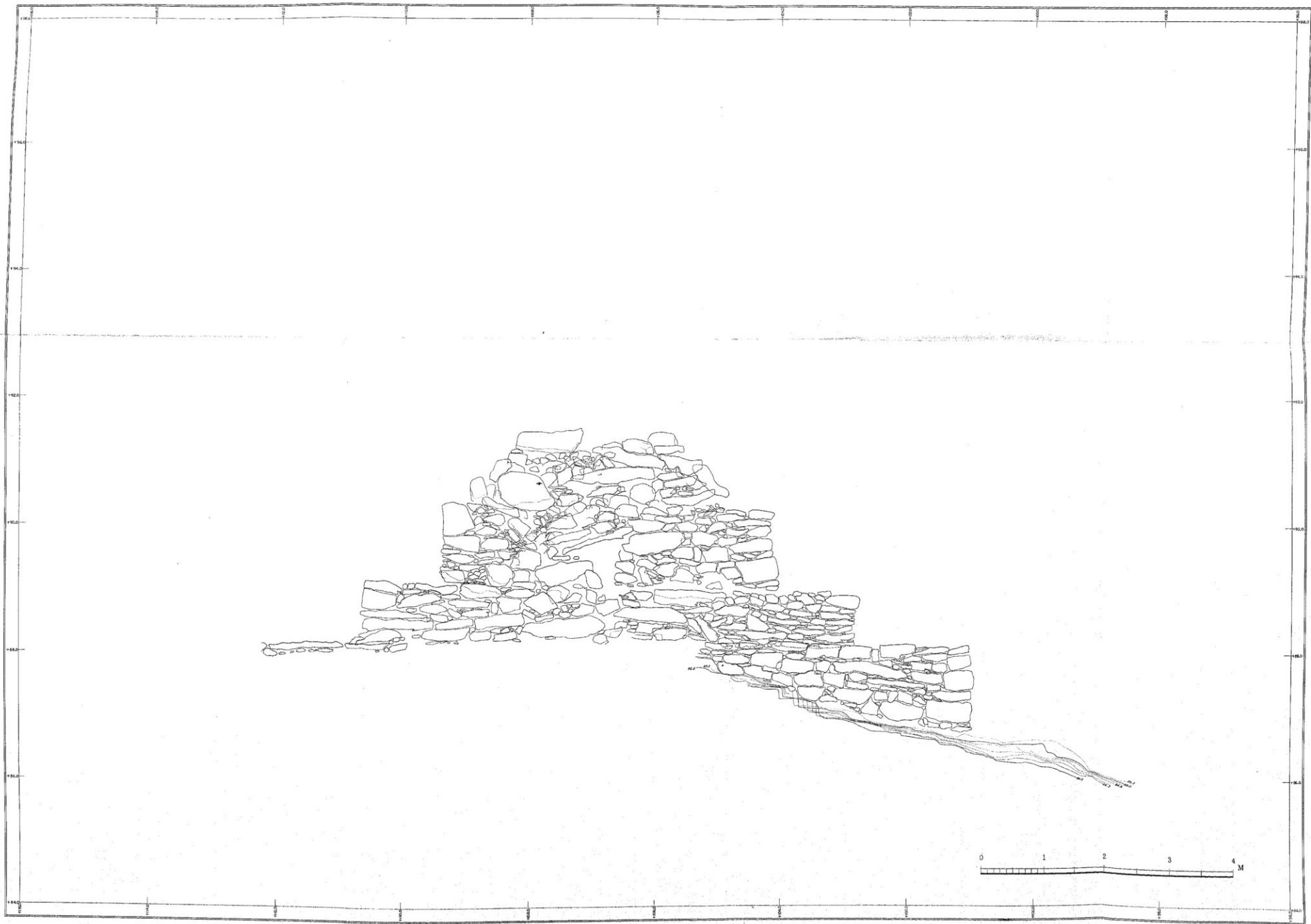


第7図 石積遺構平面図

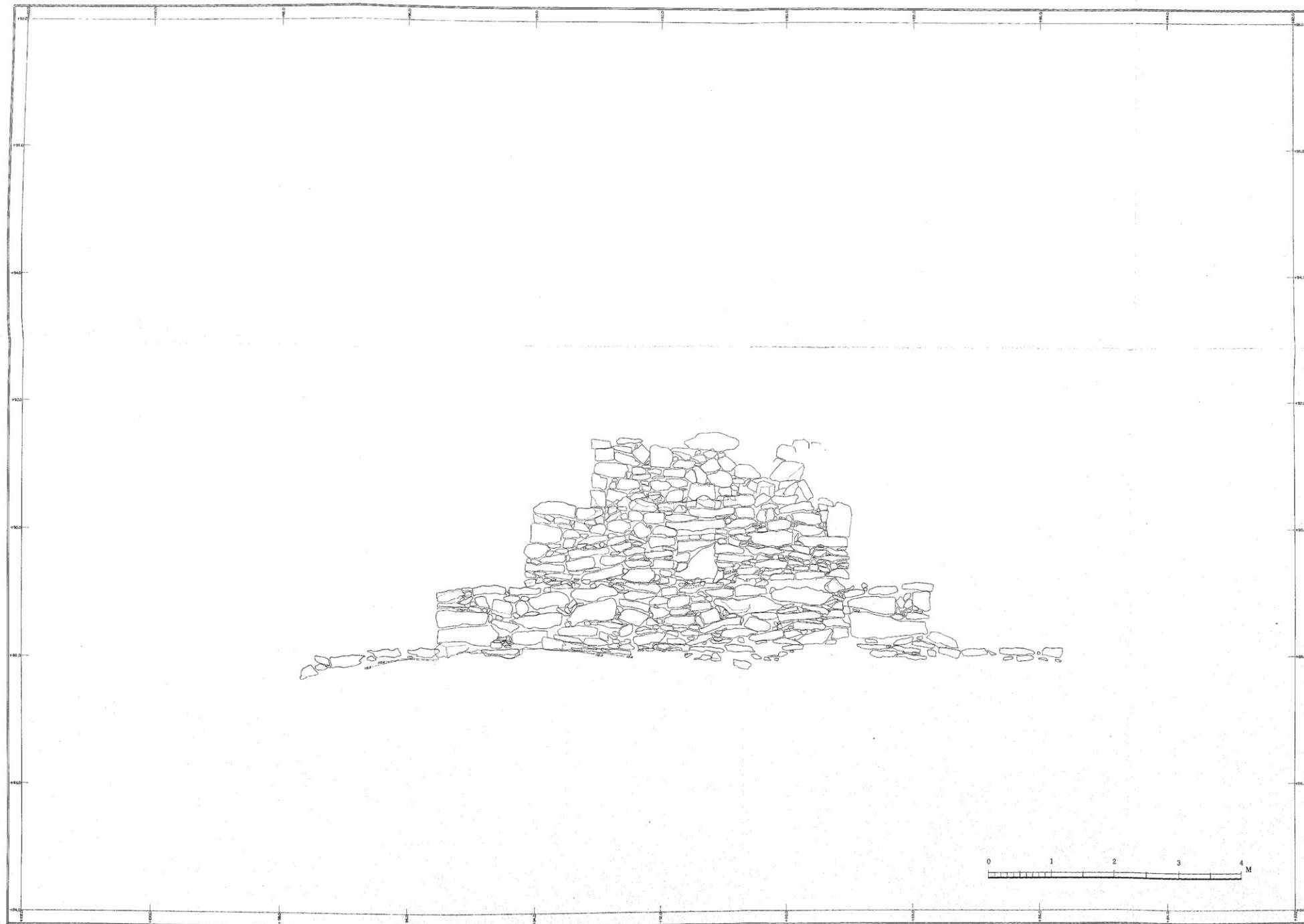




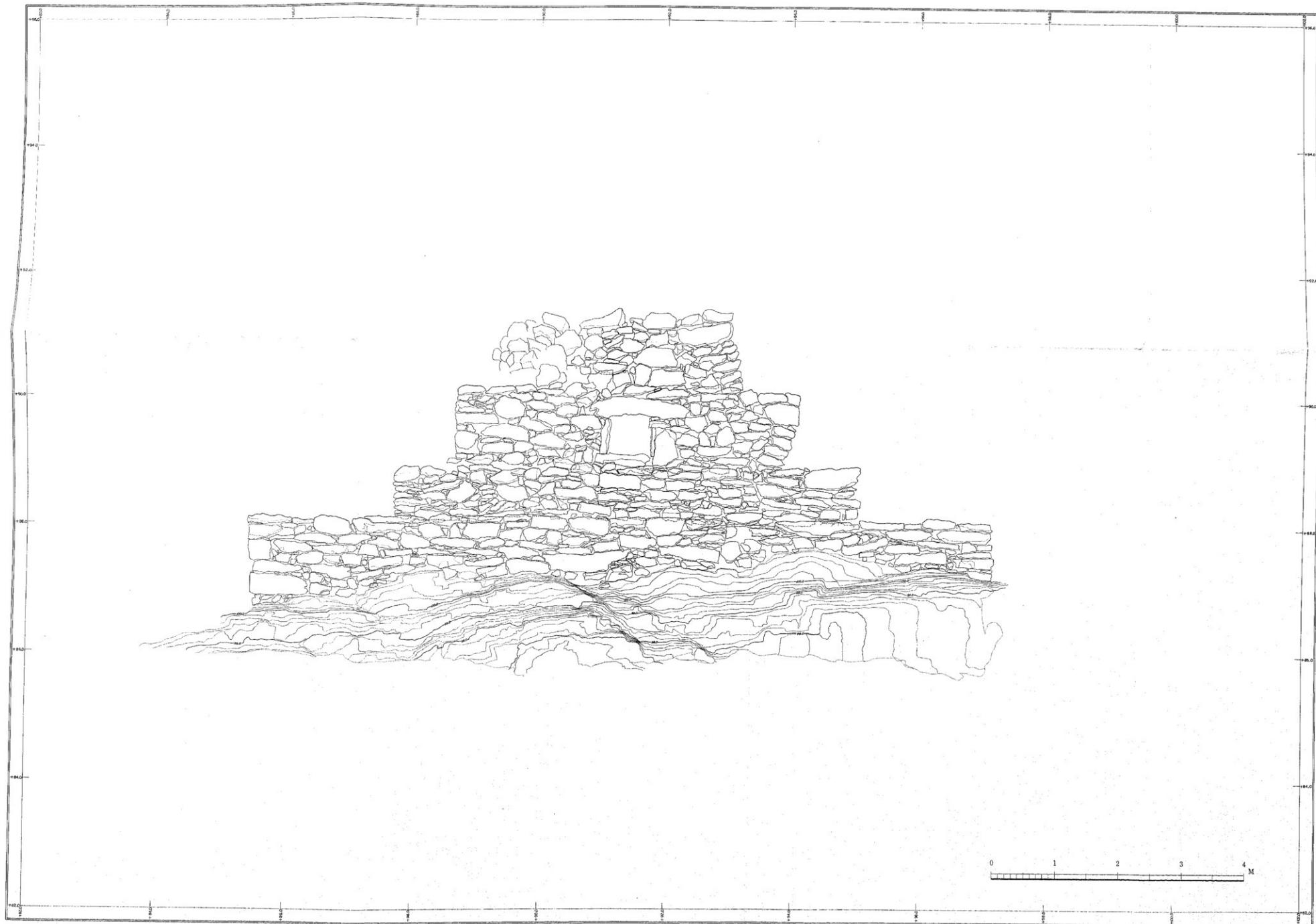
第8図 石積遺構東立面図



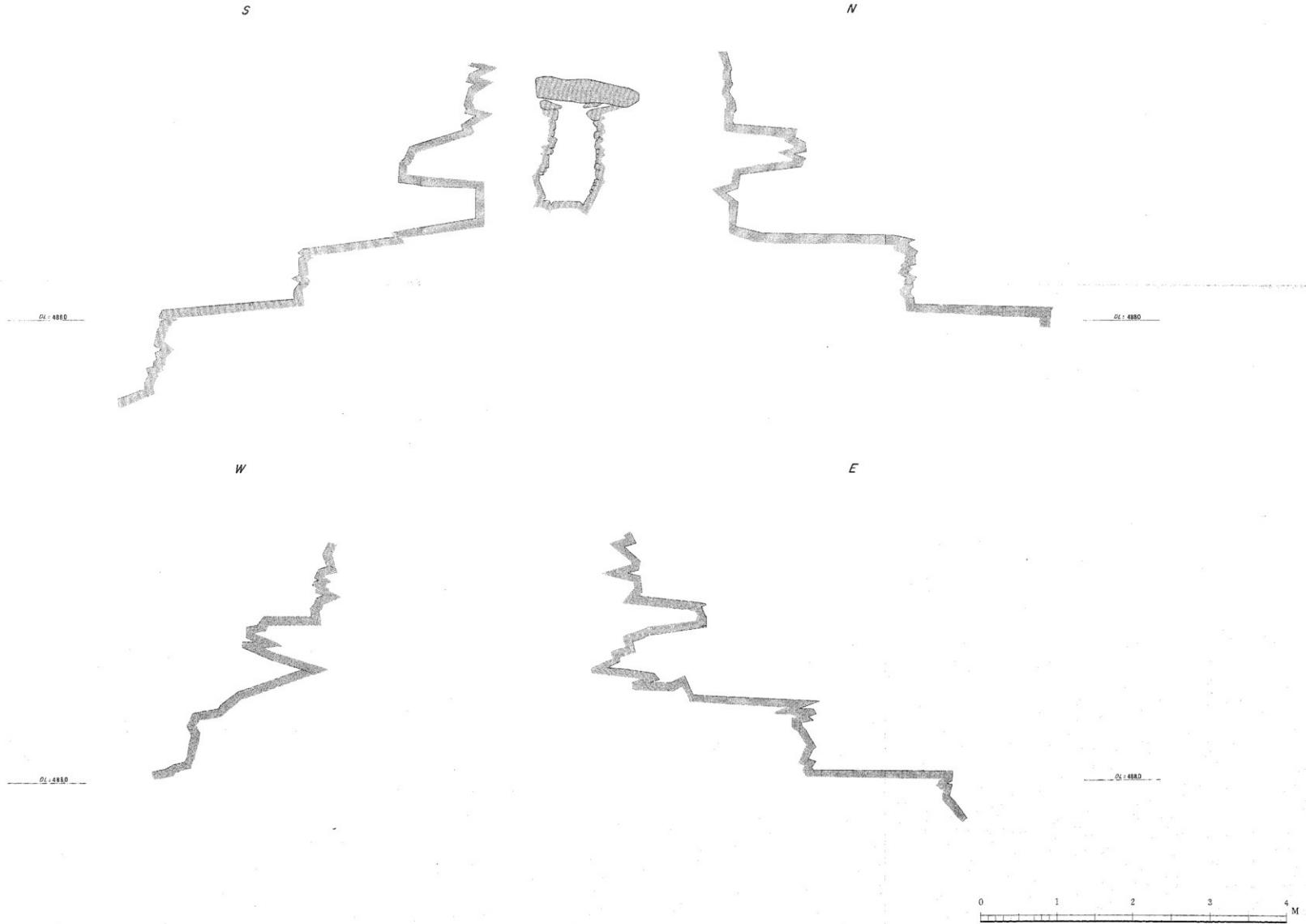
第9図 石積遺構西立面図



第10図 石積遺構北立面図



第11図 石積遺構南立面図



第12図 石積遺構断面図

第四章 トレンチ調査

石積遺構の東側の平坦地に2本のトレンチを設定した。トレンチは「鐘楼跡」と呼ばれている石の配列が所在することから、これにかかるようにした。基準杭No.1よりNo.2を基準線として、No.1よりNo.2へ5mのところで東西方向へ、また東へ5mのところで直交する南北方向のトレンチを設定した。それぞれ東西方向をAトレンチ、南北方向をBトレンチとする。交点を0とし、東西南北へそれぞれ2.5mずつの区画を設け、N-1, 2, 3, 4, S-1, 2, 3, 4, E-1, 2, 3, 4, W-1, 2, 3, 4に区分した。各区画間には50cm幅の壁を残して掘り下げた。遺構の検出される部分については、これを残すこととしたため、「鐘楼跡」と呼ばれる部分は一部を掘り下げただけである。土壠断面図はAトレンチがNo.1より北へ4m、BトレンチがNo.1より東へ5mの位置である。

I Aトレンチについて

W-1, 2区については新しい時期の擾乱がおこなわれている。W-1区は岩盤まで達し、W-2でも上半部を擾乱している。この土層には近代の瓦が多量に含まれ、炭、灰を含む。第2層は黄褐色土で礫を含み、土師器と瓦の成片も含まれている。瓦は西端の瓦溜りのものに類似するものである。第3層は礫まじり灰色土で瓦の成片を含んでいる。第4区では鉄釘も検出された。第4層は礫まじり黄色土で濁物は含まれていない。かなり大きな礫を多く含み、北側の高い部分を削平して造成した盛土である。第5層は灰色～黒色土で炭化物を含んでいる。ところによって炭を多量に含んでいる。E-3区は特に著しい。第6層はやや明るい色で淡灰色土を含んでいる。第7層は第5層とはほぼ同様であるが、西方では不明確である。この層の下層にはうすく細砂層が認められる。第8層は淡灰色粘土で、砂粒をあまり含んでいない。5～8層においては須恵器、須恵質土器、土師器、鉄釘を含んでいる。また格子目の施された平瓦の小破片を1片検出している。須恵質土器の完形品も第8層に底部をおいて検出された(第16図④)。第9層は淡灰色粗砂である。西端部の瓦溜り(第11層)は粘土と瓦がほとんどで土を含んでいない。瓦は地山までつづき岩盤上には比較的保存のよい軒平瓦が含まれている。岩盤は西端部で高まり石積がのっている。東へ約2mの平坦部のち傾斜し、約12mの間で東西方向には水平を保っている。E-4区で40cm位高まり東へ続く。さらに東の状況は明らかでない。

II Bトレンチについて

Bトレンチは北が高く、南へ傾斜している。S-3区の部分で石垣となり裏込めがみられる。土層の状況はAトレンチとはほぼ同様であるが、第4層は西端では厚くなっている。S-2区における5層はほとんど炭

である。第5～7、12層には須恵器、土師器の破片を含んでいる。S-4区では第5層がやや厚い。第12層は疊まじり灰色土で、土師器片を比較的多く含んでいる。土師器には高台付と糸切り底のものがある。この層からは縄目の平瓦2片も検出された。岩盤は北から南へ向かってゆるやかに傾斜している。トレンチより北では表土下は岩盤で、北の地山を削って南を造成したようである。

【トレンチ調査の結果について】

トレンチ調査によると石積遺構の東側平坦地は造成によってつくられたことがわかる。最下層部から検出された須恵器、土師器の破片は平安時代末と推定される。石積遺構がつくられた時には平坦地の造成はなされていなかったことがわかる。第4層の造成土の中には多量の瓦を含んでいることから、北側と東側が削平されたと考えられる。当初は石積遺構の東側に深い谷状の地形が存在したもので、後に平坦地が造成されたものである。岩盤上面の遺構の有無については小トレンチでは確認できなかったが、何も存在しなかった可能性が強い。西端の瓦溜りは南北方向につづく。

【瓦溜りと東側造成地の関係について】

石積遺構の東側瓦溜りは表土を除くと岩盤まで瓦と焼土で埋設している。1m幅のトレンチ調査においても長さ約4mの部分でりんご瓶6箱分の瓦を出土している。瓦溜りと造成層との関係を知る手がかりとなる部分がAトレンチでは攢乱土となって確定を困難にしている。断面図に示した反対側の断面においてはほぼ第3層付近まで瓦と焼土の層が確認されることから、第4層の造成土よりのらの堆積を考えるのがもっとも妥当性がある。Bトレンチの第3区第8層で格子目のたたきを施した平瓦片2個が検出されている。トレンチ調査区域内では少重しか検出されていないことから詳しい年代は決めがたい。同じ土層に含まれている土器片は平安時代末頃の遺物が含まれている。造成に先行して所在した瓦と推定される。瓦溜り中の瓦にはいくつかの種類があり古い様相のものもあって、深い谷状地形の存在した時期にも近くに建物が存した可能性がある。

III 遺 物

1 土 器 類

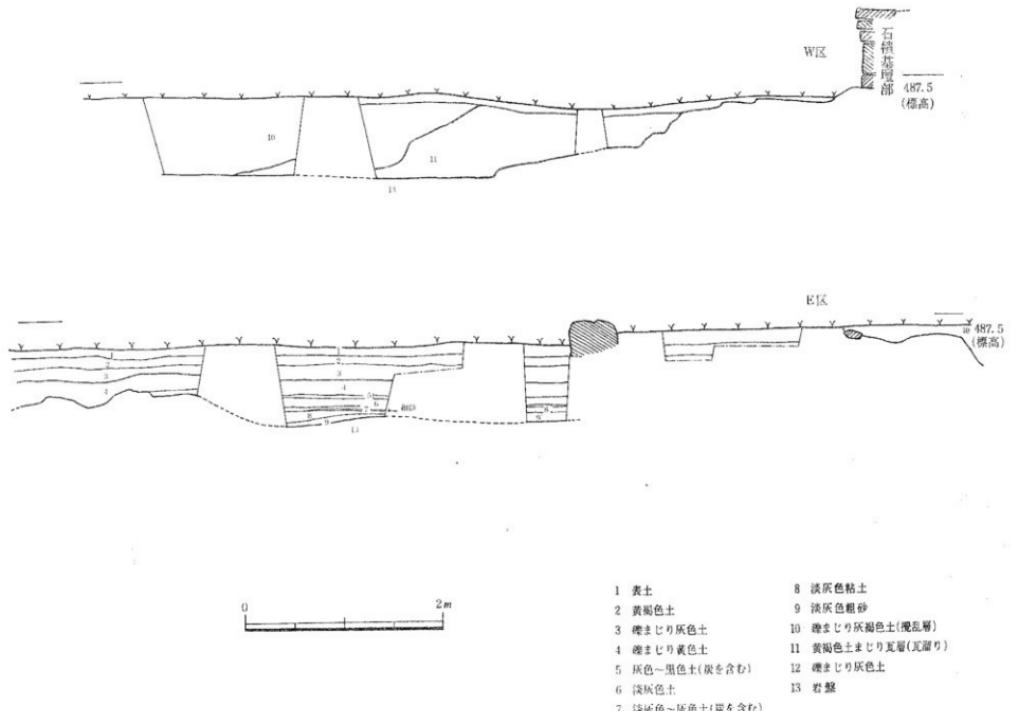
トレンチ調査と石積遺構周辺の sondage 中に検出したものである。種類は須恵器、須恵質土器、土師器、備前焼等がある。

須恵器（第16図1～3）

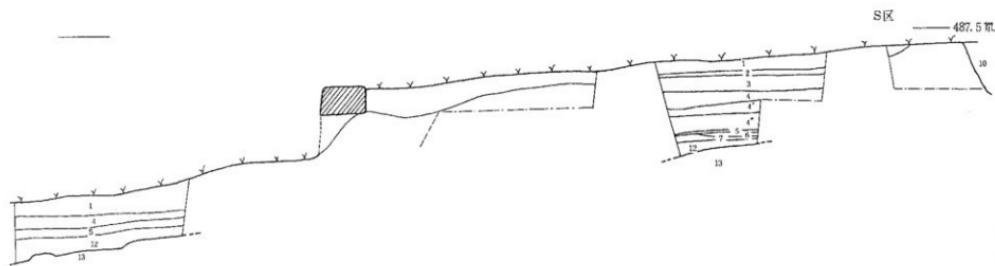
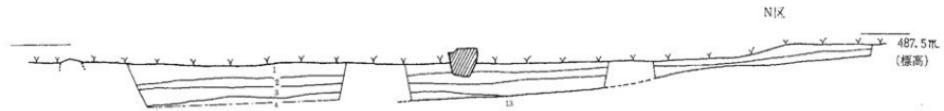
須恵器は3点ある。いずれも器形は杯である。

須恵質土器（第16図4～9）

須恵質土器はE-3区・下層(4, 5), E-4区(6, 7, 9), 他に「縄模様」の周辺 sondage 中に出土したもの(8)がある。3は完形品で口径14.8cm, 器高4.7cm, 色調は灰白色を呈する。4は3と同様の破



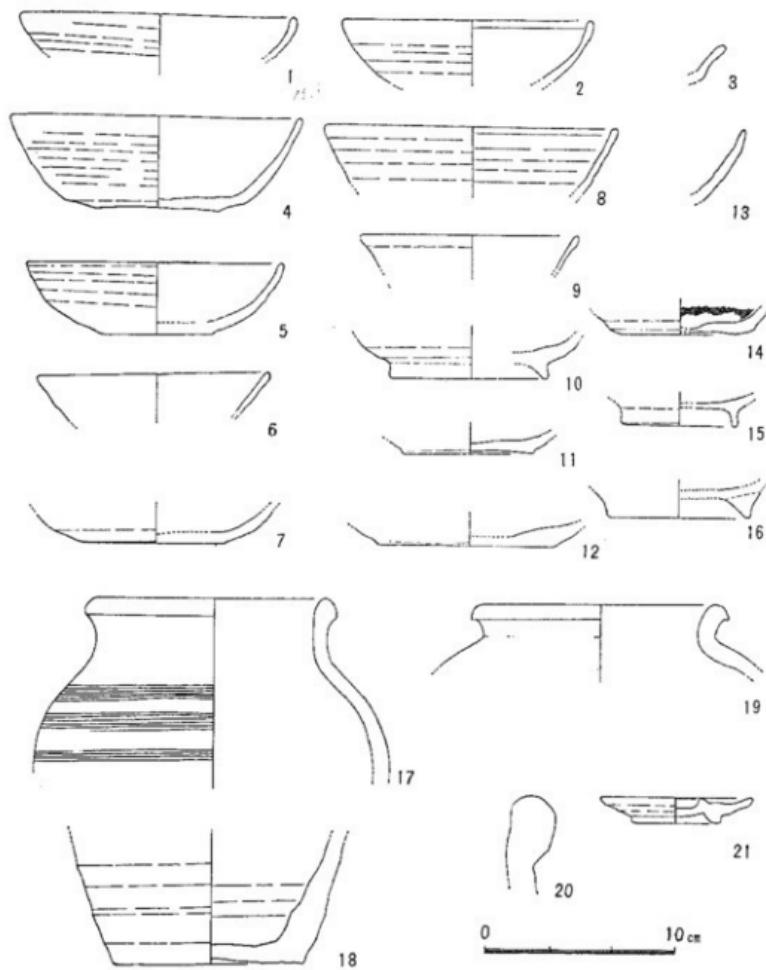
第14図 Aトレンチ土層断面図



1 表土	7 淡灰色～灰色土(炭を含む)
2 褐褐色土	8 黒灰色 粘土
3 棕まじり灰色土	9 淡灰色 粗砂
4 棕まじり黄色土	10 棕まじり灰褐色土(擾乱層)
4' 棕まじり黄褐色土	11 黄褐色土まじり瓦層(瓦混り)
4" 灰色土	12 棕まじり灰色土
5 灰色～黑色土(炭を含む)	13 岩盤
6 漆灰色土	

第15図 Bトレンチ土層断面図

片であるがやや小さい。いずれも底部は糸切り底である。他の破片も同様である。



第16図 熊山遺跡出土遺物実測図

土器（第16図10～16）

器種はほとんど皿形の土器片である。底部は糸切り底と高台付のものがある。口縁部は外開きになっていて、胎土は細かい砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。年代は平安時代～鎌倉時代頃と考えられる。ほかに新しい時期の燈明皿（21）がある。

機前焼（第16図17～20）

石積遺構の周辺部の除草作業中に採集されたものである。特に古いものはみられないようである。器形には壺、すり鉢などがみられる。

2 瓦

瓦は石積遺構の周辺部をはじめ、広範囲にわたって採集される。従来の報告においてもふれられているが、軒丸瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦の破片が多量に出土している。特に石積遺構の東側の瓦溜りから多量に出土し、E区、N区、S区の第3層（疊まじり灰色土）中に含まれている。他にはS-5区第12層とE-3区第6層から少量出土している。西側の瓦溜りの瓦は焼けており黄褐色を呈する。

軒丸瓦（第17図1、2、6）

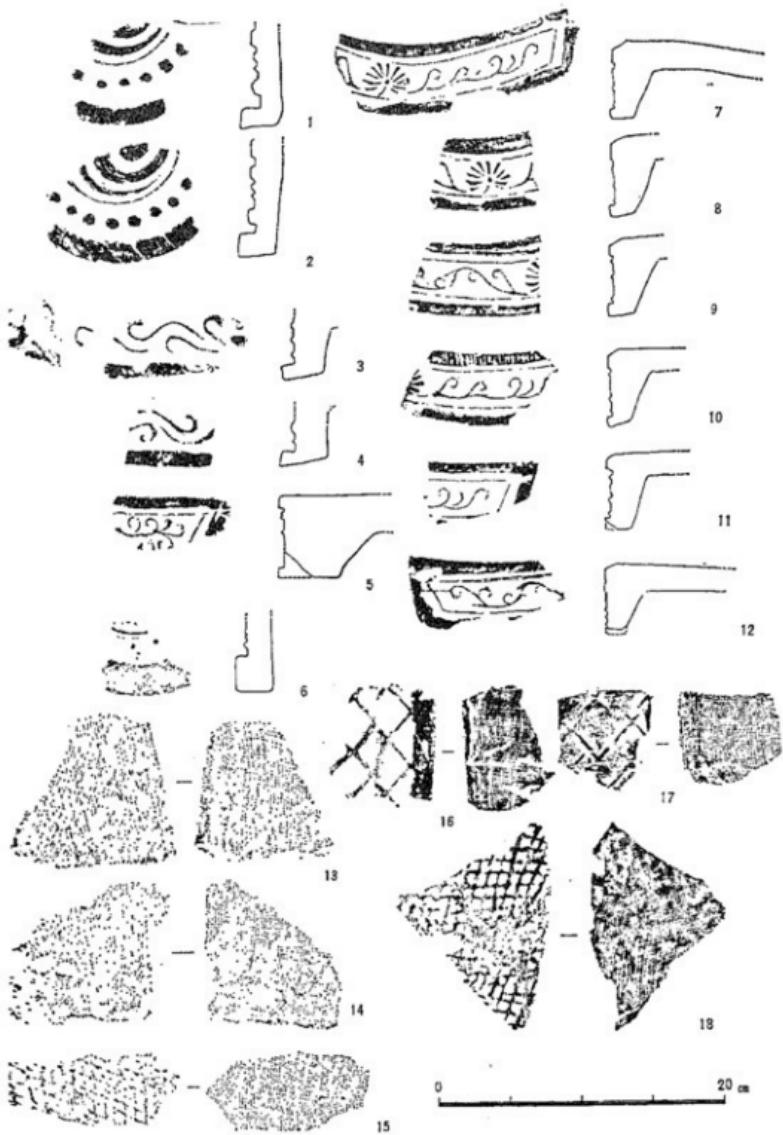
検出されたものはわずか数個の小破片である。完形のものはないが、いずれも巴文である。巴は著しく尾の長い形である。1、2は彫りが深く、6は彫りが浅い。

軒平瓦（第17図3～5、7～12）

石積遺構の東側の瓦溜りから検出されているが、完形のものはない。彫りの深いもの（3、4）と浅いものの（5、7～12）がある。前者は中央部ははっきりしないが唐草文を配している。後者は中央に菊様の文様を配し、左右に細い唐草文を配している。軒部分を欠失しているが、平瓦部分を残すもの（第18図）で大きさを測ると長さ40cm、巾27～30cm厚さ3cmである。

丸瓦

丸瓦は少量出土している。外面は磨かれているが、内面には布目痕がみられる。

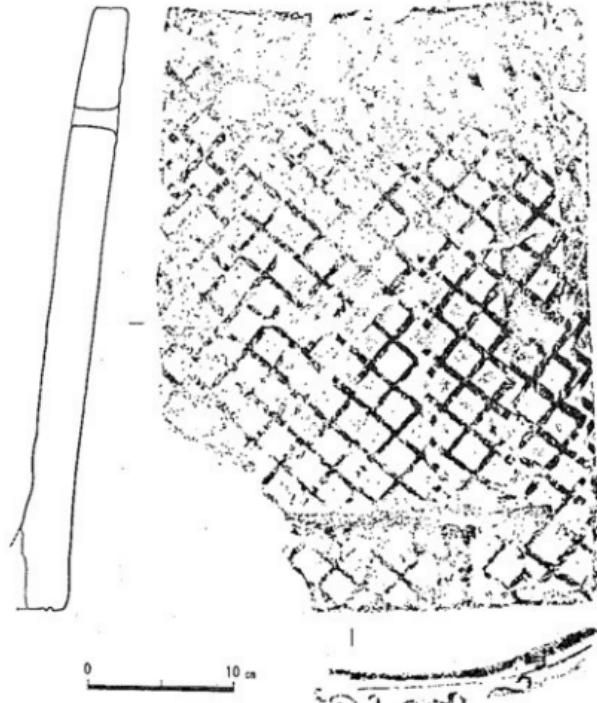


第17圖 熊山遺跡出土瓦實測圖

平 瓦 (第17図13~17)

出土した瓦の大部分が平瓦である。表面にはいずれも布目痕が残り、裏面は大部分が格子文の叩目が施されている。(15~17)。W区の瓦畠り中には含まれていないが、S-5区第12層中で検出したもの(13, 14)には絞目が施されている。

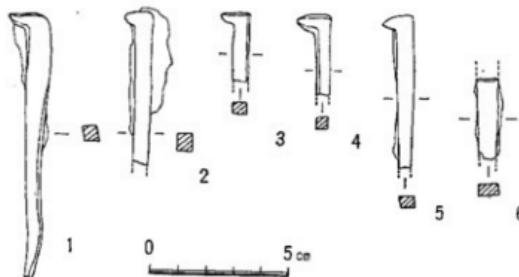
以上の様相からみて、大きく2種類がみられる。彫りの深いもの(1~4)と彫りの浅いもの(5~12)があるが、前者は鎌倉時代以前、後者は鎌倉時代後半~南北朝初期と考えられる。S-5区第12層で検出された平瓦は瓦畠りの瓦に先行するが詳しい年代はわからない。



第18図 W-2区出土瓦実測図

3 鉄釘

調査区域中で角釘が出土している。小破片は除いたが、E-3区灰色土層中で3本(4~6) E-4区第5層で1本(3) W-2区瓦層中で1本(2)、「鐘楼跡」周辺の清掃中に1本出土している。いずれも角釘で頭部を一方に折り曲げている。



第19図 鉄釘実測図

IV 「鐘楼跡」について

「鐘楼跡」と呼ばれていた部分について検討する。上面を清掃すると、石材は2つの方形が認められる。やや小さな石材を用いた西よりの方形は、聞きとり調査によって戰後まもなく石積造構のよう拝所がつくられた頃の基礎であることがわかる。これはS. 25年に梅原末治博士らの調査にかかる時までには、猿田彦神社の方に移転して残存していなかったことになる。

やや大形の石材を使用した方形の基礎はそれ以前のものであることは確認された。しかし、何時までさかのぼることができるかどうか決めがたい。トレンチ調査の結果によると第2層の上に石材が位置し、この層位には西の瓦層りと同じ瓦片を含んでいて、建物が存在した時期以降であることがわかる。

V 填状遺構について

史跡地内の草刈り作業によって石積遺構の東側平坦地北端に土盛りが確認された。そのため、除草を完全に行い、写真撮影と10cmコンターで平面実測を実施した。形態はやや梢円形を呈し、低いマウンドである。周辺部は北がやや高くなり、その他は南に向かってゆるやかに傾斜している。規模は長径 6.5m、短径 3.6m、高さ 0.6mである。表面観察では時代も遺構も不明だが、縄文か墳墓などが想定される。

(文責・正岡 雄夫)



第20図 填状遺構実測図

第五章 石積遺構分布調査

I はじめに

国指定史跡である熊山上山石積遺構は、江戸時代以来、唐僧鑑真開基の伝承をもつ、帝釈山靈山寺に付属する「戒壇」とされてきた。もっとも、昭和以後いろいろ新説も出されているが、ここでは触れない。

そして、山上他の峰々にも類似石積遺構の存在することが記述されてきた。たとえば、沼田頼輔は「小規模なものを加えるとその数9個の多きを数える」といって、⁽⁴⁾ 荒木誠一は指定石積を含めて第7号までの分布を記述するとともに略図を掲げ、すべて戒壇としている。⁽⁵⁾ さらに大本琢磨は、守時桂太氏所蔵の古版本から摺ったものとして掲げた一文の「戒壇四十八谷数四十八……」を紹介し、別掲の地図に「壇築遺跡」7号までを載せている。⁽⁶⁾ 近江昌司は「熊山には第2章に述べた(生・國指定の)石積遺構のほかに同様な小遺構群が散見していることが知られている。しかしその数量や実体について報告されたものはないようである」として、諸資料を紹介するとともに、地元の調査では「熊山の北半分(熊山町の行政区域)においては5群以上30基を越え、そのうちのあるものは北方山裾に至るまで遺営されていると云われる。ところが筆者の短日時における粗野な踏査ではあったが、確実なところ2基の小遺構を見出すことが出来たにすぎない」とした。⁽⁷⁾ ⁽⁸⁾ 近江の掲げた第1図(遺跡附近地形図)での小遺構分布には、不充分な点が認められるので、以下今回の分布調査での個々の所見を述べると、荒木の資料ともども比定していかたい。

これら石積遺構について、戒壇説のほか、經塚説・特殊造塔説・修驗道関係遺構説・高僧墳墓説など多くの説が、記述されたり語られたりしているが、以下分布調査結果を公表し、研究の用に供したい。

このたびの分布調査は、日程や経路の都合とか、見落とし分についての追加調査などにより、同一地区内での調査番号が不ぞろいになったのはやむをえなかった。その通し番号は原則として各遺構の北東隅に立てた赤杭に記入し、今後の調査・見学に便した。また一応番号を与え、杭を打ったものでも、調査終了後、調査担当者全員による検討の結果、除外すべきもの、参考に留めるべしとされたものは、以下の記述において欠番となったり、あとに一括したりしてある。

なおこの調査に当たっては、あらかじめ諸資料によって地点を推定したり、地元古老人の知見にもとづく案内によって踏査し、その途次偶然に発見したものを含めた。また古者が「ここには絶対にない」と断言する尾根や谷についても、可能な限り歩いて、存在しないことの確認に努めた。しかしながら、まだまだ知られない遺構が、知らない地点に落葉樹林におおわれて存在する可能性は、充分あるといわねばならない。また、多くの遺構が原状をほとんど留めないとほど破壊されているため、探査・参考・除外の分類にも、確信のもてないものがある。今後研究者の調査にまつところ大である。

〈注〉

- (1)熊山町奥吉原・菜王寺宝生院藏「天和3年(1683)6月20日付書上」
- (2)大亮軒「和氣綱」宝永6(1709)
- (3)松本亮之助「東擁郡村誌」元文2(1737)
- (4)沼田頼輔「備前熊山城柵遺跡考」考古学雑誌15巻6号・大正11(1922)
- (5)永山卯三郎「岡山県通史(上巻)」昭和5
- (6)赤磐郡教育会「改修赤磐郡誌」昭和15
- (7)大本琢寿「熊山雜記」吉備考古86号・昭和28
- (8)近江昌司「備前熊山佛教遺跡考」天理大学学報第25編・昭和48

II 各遺構の概要

※遺構名(Mo)は調査番号=赤杭番号

A 熊山神社境内地区

1. 熊山神社境内1号(国指定史跡石積)

熊山神社の南石段登り口から南へ約200m行くと、そこから東と西へ各約100mのびる、細長いいはば平坦な台地が広がっている。この一帯が国指定史跡であり、その西端近くに3段の石積が見られる。露出した巨大な岩盤上に、割石をもって一辺約11.7mの方形基壇(岩盤が最も低い南東隅での高さ約90cm)を造り、その上に1段目として一辺約7.7m、高さ約1m、2段目一辺約5.2m、高さ約1.2m、3段目一辺約3.5m、高さ約1.2mの方形石積を築造している。2段目の四面中央には龕が造られていて、その高さは65~90cm、幅62~73cm、奥行90~136cmである。石積の中央は堅穴の空洞になっていて、上を大きな蓋石でおおっていたものようである。

昭和11年8月25日、熊山南麓香登の南方、鶴山丸山古墳が盗掘され、30余面の鏡や見事な石枕、玉類などが出土したことが近隣人士を刺激し、本石積も翌昭和12年9月25日、西側から盗掘を受けた。そのとき5部分組み合わせで全高1.6mに達する特殊筒形須恵器と三彩小壺、それに、皮のように見える文字の書かれた巻物様のものが出土したという。三形は郷土史家水原岩太郎氏が100円ほどで入手したが、後年行方不明、筒形須恵器はいったん相生市那波の古物商が80円くらいで買取り、その後水原氏の手を経て、現在天理大学の所蔵となっている。巻物様のものは故小幡謙平氏が収集していたが現在は不明である。前二者については、Iの注に掲げた、吉備考古86号と(s)の近江論文に詳しい。

B 竜神山地区

1. 竜神山1号=行者塚(Mo1)

吉井川にかかる南熊山橋東詰から熊山上への登山路の中間点あたり、竜神山三角峰の北西に位置する双

こぶ状小丘の南丘頂に立地する。やや平坦で岩盤が露出し松林となっている。平石を立て並べてU字形にし、その内側にも同様コの字形に囲み、中央には石をもって祠を載せる台座を造っている。この祠にはかつて一本歎の下駄をはいた木像が置かれていて、行者様として信仰されていたという。外の石列北西隅には、豈島石製の一祠が置かれ、中に二本歎の下駄をはいてしゃがんでいる、おそらくこれも行者の小石像がある。

これは無論、現状を石積遺構ということはできないが、石材の形状・大きさ・数量などとともに、立地場所その他から考へて、かつての石積の二次的転用と推定した。

C 南山崖地区 (かい)

国指定石積から真西へ620～630mの所を頂とするゆるやかな一峰が南山崖で、南から南西にかけて、標高370～380mあたりから下は断崖絶壁となっている。

1. 南山崖1号 (No.2)

南山崖頂上から、真南方向よりわずかに西へ振って、上述の断崖直上に、千錦岩(墨岩とも)と呼ばれる東西30余mの巨岩がある。その巨岩南縁と断崖との間に、わずかばかりの緩斜面に立地。国有林境にある。

小形割石をもって、内部に空間を意図したように積み、その上に1.5m×1.1mの平石を載せたもの。平面はほぼ方形と見てよい。地元瀬戸町在住の土井秋夫によれば、かつてこの蓋状石の上に小石をもって小さな壇が造られており、当時の写真も持っているという。

2. 南山崖2号 (No.39)

南々東端、千錦岩の東方、大谷山方向へ舌状に突出する三方急崖の小尾根のつけ根、やや平坦な所に立地。国有林の境界を示すコンクリート赤杭No.197を立てるため転用されている。杭を立てた部分は新しい土石をもって埋めているが、外周の石は小形ながら石積遺構の原形をわずかに留めるものと思われる。

3. 南山崖3号 (No.3)

千錦岩から南山崖頂上へ登る中間やや下寄りの斜面、雜木林に立地する大規模な3段石積遺構。第1段の兩つまり谷側には、高さ1.5mくらいの石垣を東西20m近く築き、土留あるいは基壇の役を負わせているようである。流紋岩質の石材は比較的大きく、板石もあるが不整形のものが多い。2段目には窓を設け、北面と東面のものが遺存している。この3段石積遺構は、規模・形式とも山上のA1(国指定)とはほとんど同様であるが、戦後空襲によりいちじるしく破壊されてしまった。蓋石に使用されていたと思われる、大きな板石も残存している。

本遺構が荒木誠一の掲げる2号戒壇であることは疑いなく、^{I(5)} 当時南面のみ破壊されているように略図

が描かれているのに、現状はもっと大きく、西面にまで破壊が及んでいる。

盗掘よりずっと遅れて上記土井秋夫らが実見したところによれば、中央空洞部の底には数多くの円錐が多数見られ、その隙間に須恵器1片を採集した。それは径10cmたらずの底盤片で無釉、断面四角形の高台がついていたという。この破片は実見当日土井の手を離れ、以来その所在が不明である。

4. 南山崖4号（No.4）

南山崖頂上の平坦な雜木林中に立地する。いちじるしく破壊されているが、2段がほぼ確認できる。第1段の外側に、基壇かとも思える石材の遺存が認められるが確かでない。長方形のやや大きい石材もあるが、小形のものが多い。中央部には蓋石に使用されていたと思われる大形の石材があり、中央に空洞部を設けていたものと思われる。

前記荒木のいう第3号戒壇である。

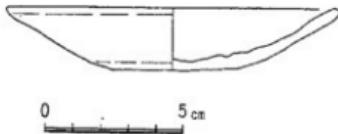
5. 南山崖5号（No.5）

南山崖頂上から北々東方向へいったん降り、再びゆるやかな登りになった、狭い尾根の中間に立地する。1段のみ原状をわずかにうかがうことができるもので、やや平たい石が数個遺存している。

荒木のいう第4号戒壇あたりの位置にあるが、状態と規模はまったく異なり、しかも付近にそれらしいものは見当たらない。

6. 南山崖6号（No.40）

南山崖北端、すぐ北辺は削去されて、弓削部落から熊山山頂方面へ通ずる俗称權現道となつておおり、經盛山と南山崖のあいだ大坂跡のすぐ西にある。狭い尾根上のはぼ平坦地に立地し、東西約4m弱、南北約2m強の範囲に、流紋岩質の石材多数が集中的に乱在し、原形を留めない。



第21図 南山崖6号（C₆）出土土器器実測図

D 經盛山(清盛山)地区

南山崖頂上から北へ約400m、標高510mという熊山山塊の最高峰である。

1 經盛山1号（No.8）

頂上独立標高点の南約10m余の平坦地に立地する。山道に接する2段積みである。全石材がほとんど残存するが、全面的に少しづつ動いていて、各段四方とも原面はつかみ難い。中央にはば円形の凹み穴が見られ

る。

上記荒木の記する第6号戒塙であるが、荒木の図では3段積みとなっており、現存する2段をその1・2段としても、2・3段としても計測が合わない。しかし状況から考へて荒木の示す1・2段が残り、3段目が消滅したと見るべきであろう。

2. 経盛山2号一勝名田比売 (No.13)

山頂から前記大坂峠へ向かって、半ば近く降りた南東尾根中腹に立地する。かなりな斜面に岩盤の露頭がある、その上に石積を造っている。中央部がとくにいちじるしく破壊されているが、全面的に崩れていて、原状を推定することはできない。

Iの注(1)で、近江昌司が「推定南山堂遺構」とした遺構である。また荒木が第5号戒塙としたのは、位置からしてこれではないかと思われる。

3. その他参考地

(No.44) 2号の西方、頂上への山道の北に接し、南東へ下降する尾根上斜面に立地。谷側には二辻が認められるが崩壊がいちじるしい。山側は埋没しており、付近に1m前後の大石が散乱している。

(No.45) No.44の北、同様の立地である。1m前後の自然石数個が点在する間に、20cm前後の石材が集中的に乱在する。

(No.46) 2号の下方、かなり急な斜面に、小さな割石が多数集中的に崩落しており、荒木のいう第5号戒塙はこれであったかもしれない。

E 風神山地区

熊山神社から西へ、経盛山に向かってのびる尾根（最高499m）が風神山である。

1. 風神山1号 (No.6)

経盛山との間鞍部が、経盛山・熊山へ通ずる山道と、北西の勢力部落から登ってくる山道との、三差路になっている地点の東約10mに位置する。雜木林の緩斜面に立地する。

かろうじて2段築成が認められるといどに荒れ崩れている。付近にも流紋岩質の石材が散乱しているが、基壇とは認め難い。石積中央部には、かつて空洞を作っていたように見える。

前記荒木誠一が第7号戒塙としたのはこれである。また、近江昌司が「8mほどの間隔をあけて位置している」2基の「小遺構」としたひとつが本遺構であろうと思われる。

2. 風神山2号 (No.7)

1号の10mほど上の斜面に立地。明らかに石積遺構であるが、石材はかなり動かされている。中央部に堅

穴状空洞部の痕跡と思われる凹所が、ほぼ円形に見えていて。外周は方形平面であったかどうかもわからぬほど荒れ、かなりの巨石が散在しているが、自然石かどうかも不明である。

近江の述べた2基の隣接する小遺構のひとつと考えられる。

3. 風神山3号＝鍛冶神様・鍛冶大明神（No.12）

風神山から南西へのびるふたつの小さい舌状支丘のうち、東側の尾根の南端近く、ほぼ平坦面に立地する。石積の石材はすべて動かされ、平面コの字形に積み変えられており、その中央に方形の台座を積んで小祠を掘っている。コの字区画内にも多数の平石が敷かれている、大形のものは70～80cm長に達する。

鍛冶大明神は、中世以来熊山南方の刀工たち（長船など）の尊崇寫く、祭礼時には参拝のため長蛇の列が続いたという。カマ・ハサミ・ナタ等が奉納されている。

F 南の峰地区

国指定石積（A1）からほぼ南へ向ってのびる尾根が、ほぼ直角に西へ折れて大谷山へ向かおうとする所が南の峰である。その北西斜面は大谷の急崖かがとに落ち、東は番屋部落から北へ深く刻まれた美音谷みねんやである。

1. 南の峰1号（No.20）

美音谷の谷頭近い奥山池から南の峰へ向かって、国有林の境界が走っているが、その線上最低位の斜面に立地。奥山池の堤防を西へ1.5倍ほど延長した地点にある。石材はその境界杭No.262に転用されている。

小形1段の石積で、石材は小さい流紋岩質である。現状が本来のものか、境界杭を立てるのに積み変えたものか不明である。

2. 南の峰2号（No.21）

前記境界線上、1号の南西にあり、南東方向へ張り出した尾根の頂上から100mほど下がった斜面に立地している。境界杭No.259を中心にして、大形の削石をもって築造しているが、大きく破壊されている。境界より南へ約2m突き出た所に、1段目かとも思われる乱れた石列があるが、断定し難い。

3. 南の峰3号（No.42）

南の峰頂上から北東約180mに一峰があるが、頂上から南々東に下がる尾根上に2基の遺構がある。

竜神山1号、風神山3号と似た遺構で、コの字形に積まれておらず、横穴式石室かと見まがうように積み方は整然としている。方形石積を転用したものか、一次的別遺構かは確かでない。つぎの4号のすぐ南（下）に位置する。

4. 南の峰4号（No.43）

3号の北、頂上部に立地。一辺推定約2.8mの方形である。中央部に平面円形の凹所がある。周辺に石材

が散乱している。

5. 南の峰 5 峰 (No.9)

3・4号のある小丘の北、山道の西側に軽かに盛り上がった雜木林中に立地する。全面的に崩れ、原状推定はできない。石材はやや大きく、もと1段積みであったらしい。

6. 南の峰 6 号 (No.23)

5号から西方大谷へ向かってのびる舌状小丘の南側に立地する。1段積みと推定されるが、石材がかなり散乱していて、本来の規模・構造は不明である。

7. 南の峰 7 号=美音院跡 (No.22)

南の峰頂点 (426.9m) よりやや北、斜面に立地する大規模な石積構造である。国有林境界杭を立てるのに石材が転用されている。もと2段まではほぼ推定できるが、多くの石材が北東と北西(谷側)に転落散乱していて、3段であった可能性もある。南(山側)はわずかに上から土におおわれ、段積みをうかがいえない。

昭和3年11月に盗掘され、径約30cm余り、2本つなげる先細り円筒状須恵器の上に、國指定石積から出土したのとそっくりの、火焰状ヒレ飾りのある蓋をもつ、計1mほどの縦簡横土器がこの付近から持去されたという。當時実見した古者の談である。なお、本遺構の東に隣接して3基の石積がかつて存在したそうである。

8. 南の峰 8 号 (No.32)

7号より南へ約50mの山頂、美音院跡の南西端に立地。一辺3.2~3.4mと推定されるが、内部に散乱する石材は少なく、10余の石は国有林境界杭No.254を立てるのに転用、積み替えられている。中心部地面に空掘樋かとも見える凹所ができている。

9. その他参考地

(No.41) 3号の南(下)に、大形の石材が散在しており、その下に小形割石が散乱している。斜面がかなり急で、独立の石質であったか、3号の石材の転落なのか不明である。

G 大谷山地区

1. 大谷山 1 号 (No.11)

南の峰の真西約500mに位置する鐘状峰が大谷山 (401m) で、その山頂平坦面の西寄りに立地。方形1段積みで、国有林の境界に利用されている。原状のままにしては整いすぎている感があり、二次的に積み変

えた可能性もある。周辺にもかなり多くの石が散乱しているほか、岩盤の露頭も見られる。

H 高津山地区

1. 高津山南1号 (No.33)

美音谷をへだてて南の峰の東にある峰が高津山で、頂上から南々東方向、袖鹿神社下社を経て送電鉄塔の南約150mの尾根上に立地する。約20個の石材が遺存し、最大のものは一辺2.5mもある巨石を用いている。西面で2段の原状をうかがうことができる。なお、本遺構のさらに南約20m地点にも石材の集中が見られる。

I 山頂三角点地区

1. 山頂三角点1号 (No.18)

一般にいう熊山山頂で、電々公社の中継アンテナ塔敷地の南に残されている、ほぼ平坦地である。508.61mの三角点の南5mに、長さ約10m幅約6mの巨岩を基盤に利用し、10~40cmくらいの石をもって石積を造ったものようであるが、現在は完全に崩落散乱し、西方巨岩外へもかなり落ちている。巨岩の東側には、石積の蓋に用いたものかもしれない大形の石が傾落している。

古墳崩壊（鎌倉期か）と思われる土器片数片を採集した。

J 尺八山地区

頂上三角点の東約700mにある一峰が尺八山である。

1. 尺八山1号=院の墓 (No.29)

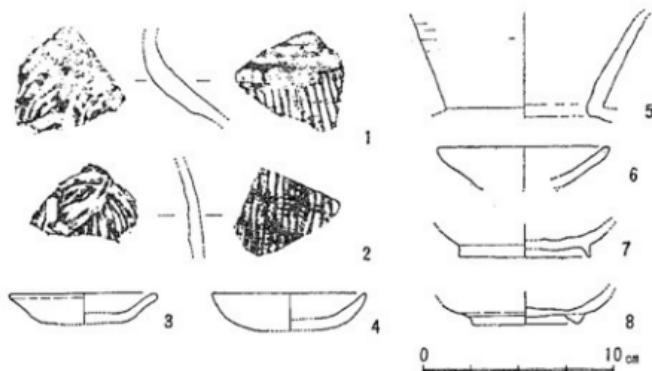
尺八山頂から南西約300m、南へのびる小尾根上に立地。径30~40cmほどの石材が使用されているが、中央部が地山まで空洞？破壊されているため、本来の形状・規模は推定し難い。

空洞？内部に、須恵器・土師器の破片が、地山直上に散乱していた。須恵器は内面にもタタキ目をもち、平安以前と推定できる。土師器は高台のつくものがあり、年代頃は平安後半～鎌倉時代と考えられる。

2. その他参考地

(No.28) 尺八山頂上から南々東約300mの尾根上、山道のすぐそばにある。一辺約1m、1段積みで、かなり大形の石を用いて方形に造っているが、境界石の可能性もある。

(No.27) 大滝山福生寺の500mほど北へ、尺八山の裾が張り出した台上に立地。送電鉄塔のある平坦部の北西端に位置する小形の石積である。中央にコンクリート境界杭が立ててある。石材は70~80cmに達するものもあり、原状が保たれているのか、二次的工作かは不明である。



第22図 尺八山1号(J1)出土遺物実測図

K 獅子が谷地区

備前市大内から大滝山福生寺を経て、曲折しつつ北上してきた大滝林道が、標高400m近くで大きく西へ曲がったあたりが、熊山上東半部と西半部を分ける地点である。ここから200mたらず東へ行くと425.5mの三角点があり、その南の谷が獅子が谷である。

1. 獅子が谷1号 (No.36)

三角点から南々西へ下る尾根上、標高390m余の地にあり、大本跡寺が「福生寺上」とし、地図でその位置を誤っているものである。

古考証では、10数年前までは高さ約1mの石積であったという。現在、長辺1m強の大石と多数の角礫が散乱し、本来の形状・規模は不明である。

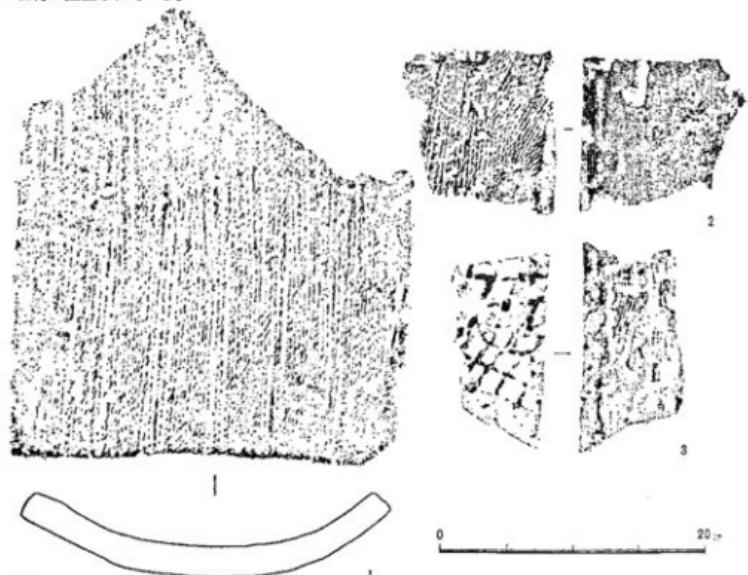
2. 獅子が谷2号 (No.37)

1号より北東へ約5mに位置し、一辺推定3mの石積で破壊はげしく、基礎に利用した大形割石により規模を推定できるだけである。それら大石の間に20~30cmの角礫多数が散在している。10数年前までは1号同様、高さ約1mの石積だったという。

3. 寺院跡および経塚? (参考)

前記三角点の南東緩斜面に布目瓦(奈良末か)・須恵器・土師器の破片が散乱し、もとの礎石かと思われる石が散見される。

三角点北側の雜木林中に經塚かと思われる遺構がある。徑約4m、高さ約60cmの円墳状で、周を囲むように石材が配置されている。



第23図 K地区寺院跡出土瓦

L 舟下山地区

熊山山頂三角点の北々東、山上東半部の西端から、熊町奥吉原へ向かってのびる一大支峰が舟下山である。

1. 舟下山 1号一犬塚 (No.16)

舟下山の南西側につながった、北西から南東へのびる細長い一峰がある。その頂上よりやや南へ下がった所に位置する。板湯池の堤防北詰めを登った所である。

方形2段の石積で、中央部の石材は掘り取られてまわりに積み上げられ、穴は地山も掘り下げられている。流紋岩質の石材は不整形で大小さまざまであり、大は長さ80cmに達する。蓋掘塚には7~8年たったと思われる小松が生えている。

M 烏帽子岩地区

Jの尺八山東方約2.5km、標高350mの一峰である。

1. 鳥帽子岩 1号 (No.48)

岩より東へ約100m、三角点の付近にかなりの巨岩があり、その上に石材が方形を推定できる形に並んでいる。石積の上部はほとんど低落しているよう、巨岩の西側や南側に石材が散乱している。巨岩上に残っている石の高さは20~25cmくらいである。

N 山上でのその他の参考地

(No.17) 山頂三角点の北々西、熊山池の北東にある小峰頂より、やや北に下がった平坦地に、大小多数の石が散乱している。遺構と断定できるものはないが、石群が東西約10m、南北5~6mにわたって集中しているのは、この小丘上、他では見られない。

(No.38) 熊山神社の北西にのびる双頂峰(雲上山)の北峰から、西へ張り出した尾根上に立地する。小形であるが整いすぎた感もあり、石質濃褐色か、小祠の台座かは断定し難い。

(No.47) ほぼ熊山山東端近く、和気町大中山の報音谷に北面して、巨岩中腹に深い洞穴がある。南西側に石を積んだものがあるが、報音堂という俗称から、報音菩薩を祀ったものであろう。

O 低位における石積遺構

A~Nはすべて、標高350m以上の熊山山上に分布しているが、ずっと低い地点にもいくつかの石積が見られる。

1. 千鶴・行人山 (No.14)

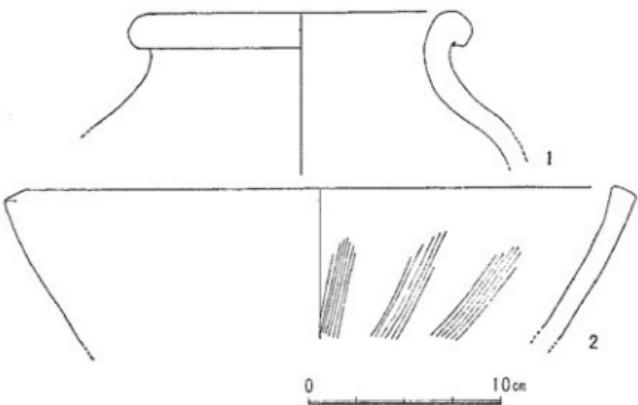
山陽本線熊山駅の真南約1kmの流尾山から、北に向かって張り出した急峻な一小峰が行人山である。頂上(121.5m)の狭い平坦地に割石をもって2段に積まれている。1段目はやや高く、しかも現状では角錐台に近い。1段目の上面は、三方が幅20cmであるのに北側のみは40cmで、この上に瓦質の小祠破片が遺存していた。

中心部から北西にかけて、2段目が盗掘で破壊され、そこに1枚の大形平石が傾落しているが、蓋石か、3段目代用であったか、祠の台座であったかはわからない。全体として原形そのままでなく、修復または変形を受けているようである。

2. 千鶴・明人山 (No.15)

熊山駅のすぐ東が明人山(153.6m)で、山頂から部落方向へ南西散西に下降し、亀池下の小池に向かう尾根上、標高約75mの緩斜面に立地する。南山崖6号と同様、全面的に破壊しており、ほぼ3m四方内に施設岩質の小石多數が集中して折り重なっている。付近にも石の散在が見られる。

中心よりやや下と、石群から谷側へ数m降りた地点とで、古墳前焼(鎌倉期か)スリバチ片とツボ(カメ?)片各1を採集した。



第24図 千軒明人山(O₂)出土備前焼夷調図

3. 坂根竜神様 (No.25)

熊山山塊の南西端近く、吉井川のすぐ東岸に、大谷山から下降する細長い尾根が、二の種部落のすぐ北で逆Y字形のふたまたに分かれた、西尾根上の最高地点に位置し、松の疏林となっている緩斜面に立地。標高わずか80余mである。1段のみであるが、原形をほとんど残さず、西側に少し離れて基壇か、もとの1段目的一部分かとも思われる石列がある。

この場所は、往時雨乞いに利用されて竜神を祭り、東側の平坦地で千貫焚きをしたというから、石積が2次的に跡かされた可能性も大きい。石材は、付近にはほとんど見られず、ここに集中し、しかもここの石も砂防工事用などに持去られているそうで、残る石は少ない。中央に蓋石を思わせる大形の石が置かれている。

4. 香豊宮山 (No.26)

香豊山西部の北方、城山池を経て森ノ木川の西斜面、山道に接して松林・ブッシュの中に立地。北西部は崩土に埋没して確認できることなくと似ている。きちんと留まれた1段のみ残っており、上部の石は城山池の堤防工事に転用したことである。一時毘沙門天を勧請したというから、そのとき手を加えた可能性もある。

見晴らしの悪い、深い谷の中にあり、背後が急斜面でもあるので、地元が昭和4年8月に石積造構の分布調査をしたとき正式登録せず、参考に留めたという。

5. その他参考地

(No.31) 備前市大内から大窓山福生寺へ向かう舗装道路の途中、クレー射撃場の西側斜面に、城塁跡と呼

ばれる石積があったという。昭和30年ごろ、国道2号線を改修したとき、この石材を利用したようである。2段の方形に積んでいて、高さは1m弱であったというが、遺存する石はわずかである。

(No.30) 大内部落の西、大内山の東麓の、北と西に山を負い、東と南が開けた地が香登麻寺である。この北東、尾根端部に位置している。傾斜の変換点にあり、山道に接している。長さ40~50cmの石を2段に積んだものが、50年ほど前に残っていたという。石材は宅地造成などに持ち去られ、現在10個ほどが残るにすぎない。

(No.34) 香登麻寺の北西で、現在アパートが建っている北西端にある。かつて、高さ60~70cmの2段の石積があったというが、現在は一辺約2.6~2.7mの石列が残存するのみで、中央部は自然崩落まで掘られている。

※ 香登麻寺南方の水田(かつての寺域内)に高さ3mをこす円墳状の土塔らしい草山があって、明治4年の絵図には「戒壇」と記入されているが、国道2号線工事の土取りのため消滅したといふ。

III 調査を終えて

以上、3ヶ月で調査した48遺跡のうち、4(No.10, 19, 24, 35)を除外し、国指定石積を加えた45遺跡についてその概要を述べた。45のうち、不確実として参考に留めたもの12を差引くと、確実・ほぼ確実とした遺構は33となる。なおこれ以外に、地元古者の簇によって、かつて確実に存在していたが、池の堤防や道路工事などにより消滅したと推定できるもの数基を数えることができる。これら遺構群の分布を大きくまとめてみると下表のようである。

付表1 石積遺構分布状況

	山上西半部	山上東半部	低位のもの	計
確実・ほぼ確実	25	4	4	33
参考地	8	1	3	12
計	33	5	7	45

圧倒的に山上(ほぼ標高350m以上)西半部、とくに、西側からえぐり込んだ大谷の急崖をめぐる、南北の峰から南山崖にかけての一帯に集中的である。つぎに全体的特徴をまとめてみよう。

1 規 模 と 形 状

現状において、1段目の一辺がほぼ5m以上と推定できるものは、A₁ (国指定)・C₃ (No.3)・F₇ (No.22)・D₁ (No.8)・L₁ (No.16)・O₄ (No.26)の6遺構である。A₁・C₃・F₇の3基は、大谷を眼下にほぼ正三角形の頂点のように分布しており、D₁はC₃の北方最高峰の頂上、L₁は山上東半部に遠く離れ、O₄はずっと低位(標高110余m)の深い谷にある。またA₁・C₃は3段で、2段目四面に龜

をもっているが、他の全石積は、現状では段と推定できるものはなく、1~2段で、轟をもつものも見当たらない。荒木誠一は、C₄ (No.4)・C₅ (No.5)・D₁ (No.8)・E₁ (No.6)をすべて3段とし、細かい計測を記入した略図を掲げているが、^{I(6)}現状では確かめようもない。大型6遺構以外の、原寸を推定できる石積は、一辺3~4mていどの中形、2~1mの小形である。大部分の石積が破壊または変形されているので、全体の傾向を述べることはできない。

2 遺 勉 物

遺構の性格に迫るために重要な手がかりのひとつ遺物は、急いで分布調査の上ではほとんど発見できなかったが、検出した、あるいは検出したといわれるのはつぎのとおりである。

〈須恵器〉 A₁ (国指定)・C₃ (No.3)・F₇ (No.22)・J₁ (No.29…土師器も伴う)

〈古墳前焼〉 F₈ (No.42)・I₁ (No.18)・O₂ (No.15)

なおこのほか、C₈ (No.40)からも若干の土器が検出され、また個別の記述で触れたように、K地区からは、須恵器や奈良後半と考えられる古瓦が出土している。

3 立 地

全遺構について築造の立地を調べると、その大部分が眺望のよい山頂、または尾根上の斜面にあるが、いっぽうで眺望はかならずしもよくはないが、山上より八方へ通ずる登山道の分岐点など、交通上の要地に立地するものもある。C₈ (No.40)・E₁ (No.6)・E₂ (No.7)・O₃ (No.25)・O₄ (No.26)などがそれである。

また、A₁ (国指定)をふくめ、自然の大岩盤ないし巨石の上に築造されたものもかなりあった。

4 遺構の破壊と、保護の必要

すでに述べたように、ほとんどの遺構が大破されている。自然崩壊もいくらかはあるのであろうが、その多くは溜池の堤防や道路・砂防工事等への持去り、国有林境界への転用であるが、石材の多くを残しながら、中央部が大きくなっているものは明らかに盗掘である。昭和11年の鶴山丸山古墳の盗掘がきっかけとなって、A₁ (国指定)が盗掘されたことはすでに述べたところである。以来盗掘は断続的に行なわれたらしく、荒木誠一の略図^{I(6)}と比較しても、該当遺構の面影もない現状である。大戦後の盗掘についても耳にしており、これ以上破壊を免過ごすならば、これら遺構群の性格を明らかにすることはますます困難となろう。

例えばA₁ (国指定)と同規模のC₃ (No.3)つまり南山崖の巨大な石積遺構などは、町の指定すら受けていない状況である。また、他の遺構群も、たとえ小形であろうとその分布に重要な意味があるわけであるから、これらについても転用・変形することのないように、充分配慮しなければならない。

幸か不幸か、大部分の遺構が国有林内にあるわけで、その気になりさえすれば、保護保存は民有地内よりもはるかに容易であろうと思われる。全国的に類例のきわめてまれな、本遺構群の充分な保護を願ってやまない。

(文責・角田 茂)

付表2 熊山山塊石積遺構群一覧表

※ 范囲のうち△は参考、×は除外、他はほぼ確実

記号番号	名 称 (調査番号)	所 在 地	段 数	1段1刃	確 度
A 1	熊山神社境内1号 (国指定)	熊山町奥吉原、熊山	3	7.7 ^m	
B 1	竜神山1号=行者様 (No.1)	瀬戸町弓削、畑	?	?	
C 1	南山崖1号 (No.2)	タ タ 赤石	1?	1.5?	
C 2	南山崖2号 (No.39)	タ タ	1?	1.6?	
C 3	南山崖3号 (No.3)	タ タ	3	7.6	
C 4	南山崖4号 (No.4)	タ タ	2?	4.5	
C 5	南山崖5号 (No.5)	タ タ	1?	2.1?	
C 6	南山崖6号 (No.40)	タ タ	?	?	
D 1	経盛山1号 (No.8)	瀬戸町弓削赤石 熊山町勢力	2?	5.5	-
D 2	経盛山2号=樅名田比堀 (No.13)	熊山町勢力、内御宿	1?	?	
	(No.44)	タ タ	1?	?	△
	(No.45)	タ タ	?	?	△
	(No.46)	タ タ	?	?	△
E 1	風神山1号 (No.6)	瀬戸町弓削、赤石	2?	3.1	
E 2	風神山2号 (No.7)	タ タ	1?	?	
E 3	風神山3号=銀治神様 (No.2)	熊山町奥吉原、熊山	?	?	
F 1	南の峰1号 (No.20)	備前市香登、奥谷	1	1.4	
F 2	南の峰2号 (No.21)	タ タ	1?	?	
F 3	南の峰3号 (No.42)	タ タ	?	?	
F 4	南の峰4号 (No.45)	タ タ	1?	2.8?	
F 5	南の峰5号 (No.9)	瀬戸町弓削、赤石	1?	2.7?	
F 6	南の峰6号 (No.23)	タ タ	1?	?	
F 7	南の峰7号=美音院跡 (No.22)	備前市香登、奥谷	2?	4.8?	

記号番号	名 称 (調査番号)	所 在 地	設 数	1段1辺 m	確 度
F 8	南の峰 8号 (No.32)	備前市番登、奥谷	?	?	
	(No.41)	タ タ	?	?	△
G 1	大谷山 1号 (No.11)	瀬戸町弓削、備前市番登	1	1.2	
H 1	高津山南 1号 (No.33)	備前市番登、奥谷	2?	3.0?	
I 1	山頂三角点 1号 (No.18)	熊山町奥吉原、保々呂	?	?	
J 1	尺八山 1号=虎の墓 (No.29)	備前市大内、熊山	?	3~4	
	(No.28)	タ 大瀧山	1	1.0	△
	(No.27)	タ タ	?	?	△
K 1	獅子が谷 1号 (No.36)	備前市伊部、奥山	1?	3.4?	
K 2	獅子が谷 2号 (No.37)	タ タ	1?	?	
L 1	舟下山 1号=大塚 (No.16)	熊山町奥吉原、保々呂	2	6.5?	
M 1	鳥帽子岩 1号 (No.48)	和気町大中山広谷 備前市西片上	1?	1.6?	
N	(No.17)	熊山町奥吉原、保々呂	?	?	△
	(No.38)	熊山町勢力、内御浦	1	?	△
	(No.47)	和気町大中山、觀音谷	?	?	△
O 1	千鉢行人山 (No.14)	熊山町千鉢、瀬尾	2	2.1	
O 2	千鉢明人山 (No.15)	熊山町千鉢、向山	?	?	
O 3	坂根竜神櫓 (No.25)	備前市坂根、川合	?	?	
O 4	番登宮山 (No.26)	備前市番登、城山	1	4.9	
	(No.31)	備前市大内、南小路	2?	?	△
	(No.30)	備前市大内、番登寺跡	2?	?	△
	(No.34)	タ タ	2?	?	△
	(No.10)	瀬戸町弓削、佐原			×
	(No.19)	備前市番登、奥谷			×
	(No.24)	タ 伊部、奥山			×
	(No.35)	タ 大内、鬼ヶ城			×
参考①	大瀧山造構 (他小造構 5)	岡山市草ヶ部	3?	10m × ? 6m × 4m	
参考②	珠千塙地区 (計 2)	備前市・和気町大中山			

【付 記】

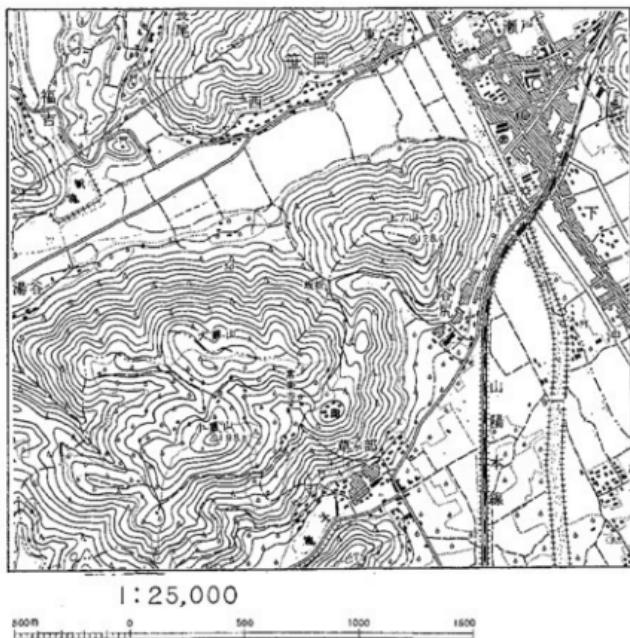
以上調査した熊山山塊の周辺にも、関連する石積遺構ではないかと見られるものが若干存在する。つぎにその概要を述べる。

1. 大廻山地区（岡山市と瀬戸町の境）

熊山山塊西端部にもっとも近い山陽本線の駅は万富駅であるが、ここから西へ行ったつぎの駅は瀬戸である。瀬戸駅から南西方向約2km付近を頂とする山が大廻山である。

この大廻山が南東へ張り出した尾根、つまり草ヶ部部落の北側の、標高約140mの丘上に、もと3段を思わせる石積みがある。地元の旧家・井上家の所蔵する江戸時代の古地図に、経塚と記されているものであり、荒木誠一が「改修赤磐郡誌」にも略記しているところである。熊山山塊の石積遺構にくらべ、石材のほか土の量がかなり多いようである。かなり石材を失い、また転落しているものも多いので、原形復元は困難ではあるが、3段の各一边の長さを推定すると、下から10m、6m、4mとなる。

なだらかなこの小丘上には、これ以外にも石積の崩壊と考えられる壊状の石群5が存在しており、落葉・腐植におおわれている。この丘からは東方熊山山塊を望見することができる。



第25図 大廻山地区石積分布地

2. 珠千瀬地区（備前市と和気町大中山の境）

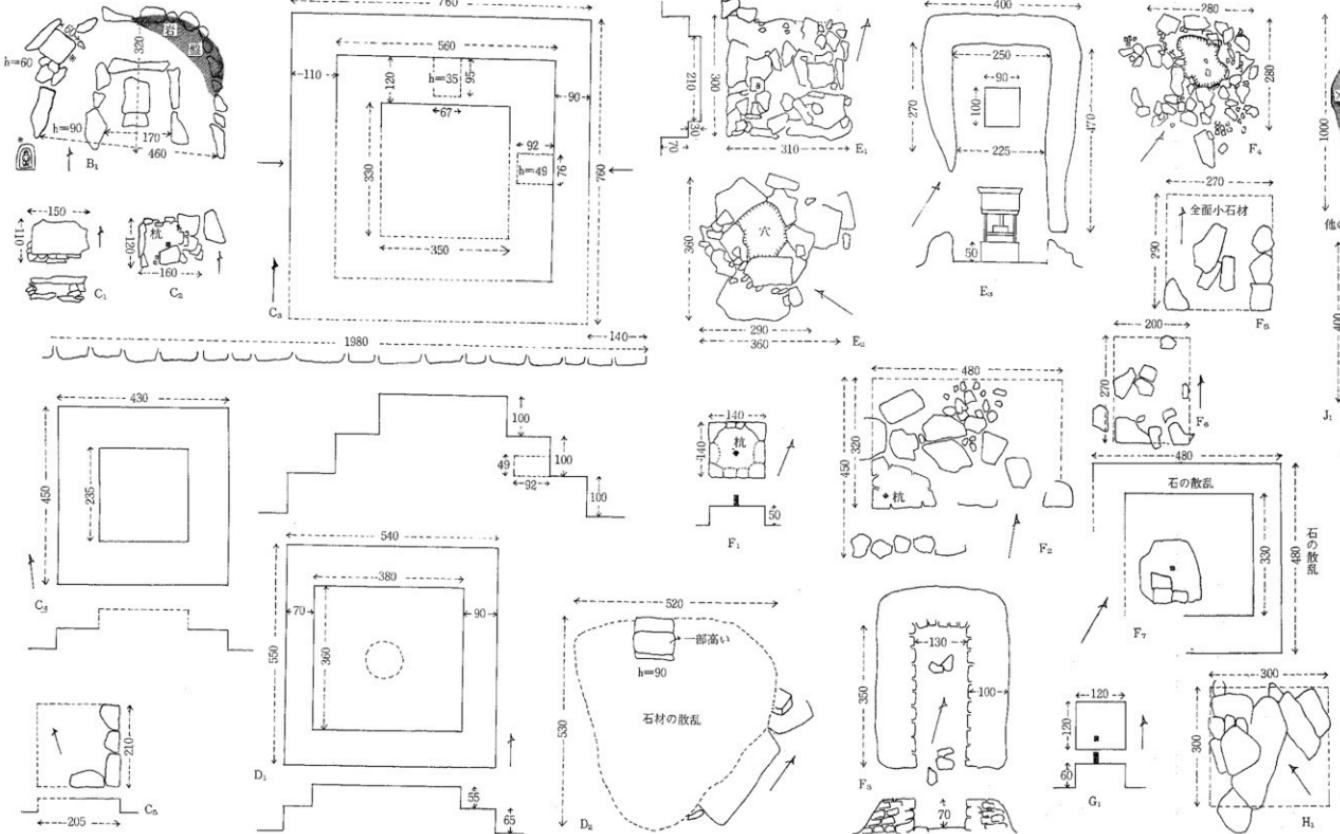
熊山山塊の東麓は、北半が和気町大中山、南半が備前市に属しているが、大中山の東、森瀬池の谷を東北東に登りつめ、吉永町との境界を南へ登りきると 300.8m の三角点がある。そのやや南尾根上に、かつての石積遺構ではなかろうかと思われる石材の残存が現られる。地表すれすれに見える岩盤上に、若干の積み石があり、中央は空洞部を作っていたようである。全体の形状は破壊のため不明であり、付近に石の散乱が現られる。

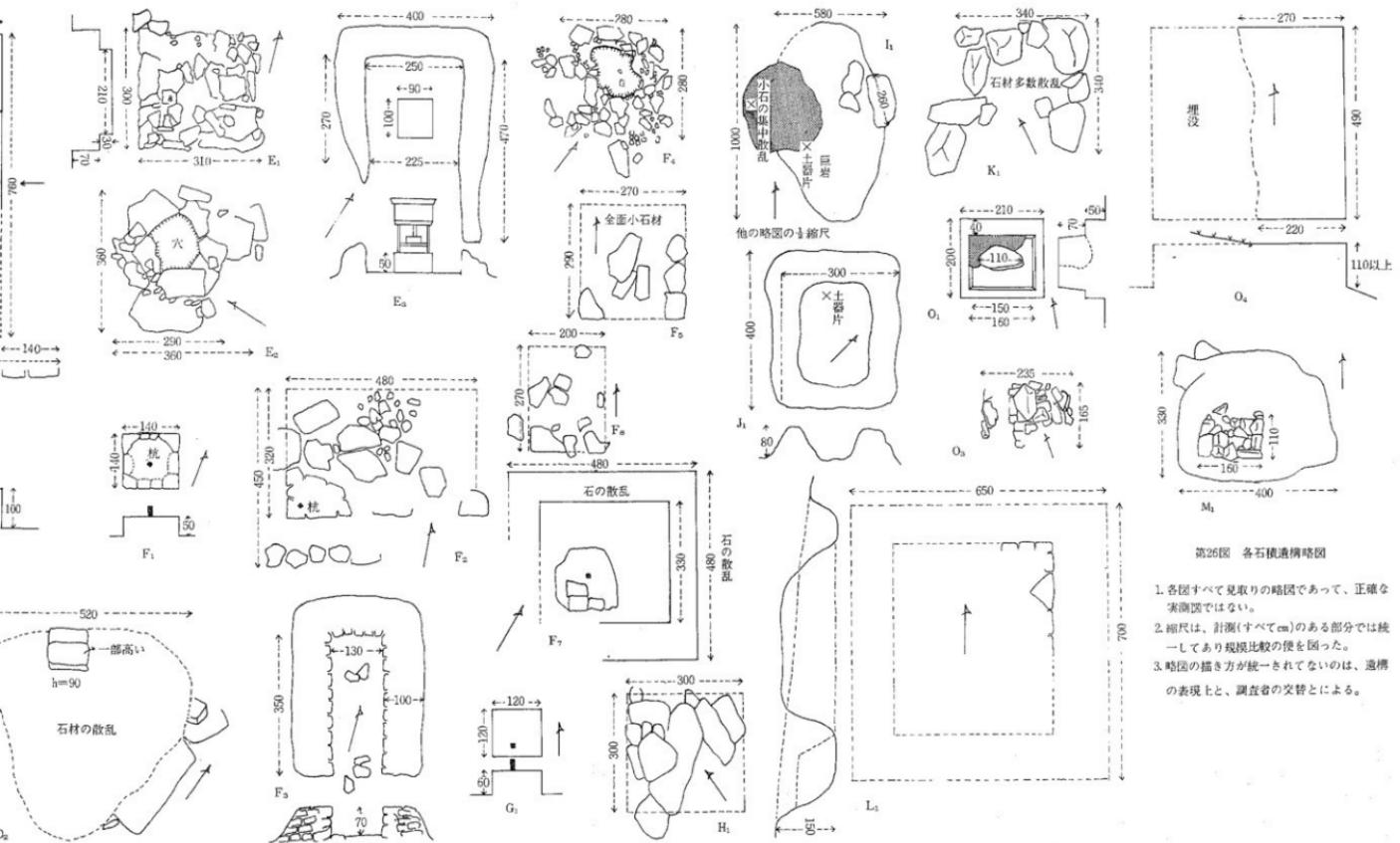
ここから尾根をさらに南へ下った地点、山道の東側にも、岩盤上に多くの小石材が、東西約 4 m、南北約 6 m にわたって集中的に崩れ重なっている。段数・規模は不明であるが、石積遺構の可能性が強い。

この両遺構の立地する地点は、立木さえなければ西方に熊山連山を望見することができる位置である。

以上 2 地区について、8 基ほどの存在を記したわけであるが、たまたま記録のあったものや、地元研究者の知見によったもので、他にも存在する可能性を指摘しておきたい。

（文責・角田 茂）





第26図 各石積遺構略図

- 各図すべて見取りの略図であって、正確な実測図ではない。
- 縮尺は、計画(すべてcm)のある部分では統一してあり規模比較の便を図った。
- 略図の書き方が統一されてないのは、造構の表現上と、調査者の交替による。

第六章 ま と め

熊山遺跡は、西面上部石積が一部崩壊したので、これを修理し、環境整備することとなつたが、この事業に先立つて、精密な実測図を作製すること、石積遺構東側焼瓦出土地点および、埴輪跡と称される遺構の実体を究明すること、類似石積遺構の分布調査を実施することが、文化庁の指導によって計画された。

このため、熊山町教育委員会が、熊山遺跡緊急発掘調査委員会を組織し、昭和48年9月13日に第1回の委員会を開いて実施案を検討し、49年1月までの5ヶ月を費してその事業をおこなつた。その成果は次のとおりである。

I 石積遺構の実測

国指定石積遺構付近を西端とする、一帯東西80m、南北50m、約4000m²を平板測量で測った。石積遺構については、東西南北各面で36ヶ所からのステレオ写真（計45モデル）を撮影した。写真縮尺は40～100分の1である。これにより、平面図1面、側面図各面図4面、断面図東西および南北各1面計2面の、合計7面の図の図化を実施した。その精度は、実寸で図面上±1mmの範囲内で、とくに側面図は複雑な石積の細部まで正確に実測することができた。ただ各側面の龕内両側面および奥壁は、影の部分で不能のため、別途実測して側面図にはめこんでいるのは、写真測量の制約上やむをえないものであった。

熊山遺跡の実態については、かつては簡単な見取図しかなかったが、昭和25年7月、梅原末治博士が計測され、平面図と、東西・南北2方向の断面図を作製され、「吉備考古」86号に発表されたものが、学術的な紹介の初めであった。長年それ以外に掲るべきものがなかったが、昨48年、近江昌司氏が天理大学学報第85編に発表された「備前熊山仏教遺跡考」は、東面の側面図を加えておられる。いずれにせよ、今回はじめて、熊山遺跡の精密な現状実測図が完成したものであり、今後の研究と、保存の原点が確立したと言いうる。

実測図完成後日時がないので、今後の検討にまたねばならない点ばかりであるが、2、3気づいた点のみを報告しておきたい。

1. 最下段は、29.7cmを1尺とすればほぼ天平尺の40尺の壇を形成する。ただし、それ以外の数値は天平尺では適当な数値にはならないので、簡単に天平尺とはいいきれない。
2. 南辺と北辺は平行している。
3. 最下段は平行四辺形であるが、3段目と4段目は台形になっている。これらの変形は集成時の誤差で、3段目と4段目の東南隅の角度は88°45'である。
4. 龕の南北面は基準面と直交し、東西面のそれは各辺に直交するが、各辺が振っているので、南北方向とは1°15'偏っている。

5. 3段目のテラスの幅はすべて瘤の実行と一致している。

以上の結果が、どのような技法によってもたらされたものかは、今後究明すべき課題であろう。

Ⅱ 石積遺構東側の発掘調査

石積遺構は岩盤の上に築成されているが、その東の平坦面から焼瓦が出土したり、「鐘楼跡」と称する礎石、およびこれに関連するかのような石列が現られる。この東部遺構の性格を究明するため、十文字にトレンチを入れて調査した。

その結果、平安時代末ごろまでは、石積遺構の東側岩盤は東に下がり、「鐘楼跡」東方付近との間に浅い窪地がある、この部分はほぼ露出していた。ただ石積遺構に対して何らかの宗教儀式が行なわれたためか、木炭などが検出され、若干の時代限定ができる小さな土器が覗入していた。

鎌倉時代末ないし南北朝時代になって、この付近に瓦葺の建物が建てられ、これが火災にあってこの谷を埋める大きな要因となったようで、格子の卯目のある平瓦からは、鎌倉時代的様相がうかがえるが、蓮花を中心配した唐草文軒平瓦は、むしろ南北朝に下げて考えるべきものようである。しかしその時代判定は、出土瓦全般、および吉備地方の当代の瓦の、編年的研究の進展をまつべきであろう。

この瓦葺建物の元の位置・規模については、今後の調査にまたねばならないが、総社市井山宝福寺に、これと関係があると考えられる鐘が残っている。

「奉難鍾

備州熊山靈山寺 大工左衛門尉

應仁庚午年十一月十五日

新田庄内寺見村

大壇那祐長」

と5行の銘文が刻まれているが、これが瓦葺建物の存続の下限を示す、一つの例証となるであろう。

この寺が鳥居に歸した後に、相当規模の整地が行なわれて、ほぼ現在見られるような姿になったようであるが、この時代については今のところ明らかでない。ただ、「鐘楼跡」の2まわりの方形石列のうち、北西寄りにずれる小さい石のものは、敗戦直後の時期に、石積遺構に対する選擇所を作るためのものであったことが判明している。南東寄りにずれる、より大きい石の列はそれよりも古く、何の目的のものはわからぬが、靈仙寺鐘楼とするには確証がありにも少ないようである。ただこの整地された地域の、石段を伴う石垣は相当大規模なもので、その性格は今後の調査にまたねばならないが、当初予想したように靈仙寺そのものとも、簡単には結びつけられないようである。

Ⅲ 分布調査

史跡に指定されている石積遺構と同様のものが、熊山一帯に分布することは、第五章に記載されているとおり早くから知られているが、石積遺構の性格を明らかにする上で、この分布および類似遺構の状況把握は最も重要であると判断され、全力を擧げて実施した。その結果、熊山山塊において、国指定石積以外に、石

積造構およびその残かいと考えられるもの44ヶ所を記録した。そのうち、境界石らしいものなど疑問のある12ヶ所を差引いても32ヶ所、国指定石積を加えて33ヶ所が登録されることになった。

このうち25ヶ所は山上西半部に集中しており、東半部はわずかに4ヶ所、低位のもの4ヶ所である。

最下段一辺長5mをこえるものが6基あって、うちC₃は3段集成で高もあり、国指定のものとほぼ同規模のものであることが明らかとなった。このことは熊山遺跡の性格究明上、きわめて重要な問題をなげかけることになるであろう。その他のうち、小規模のものの性格究明も。今後の調査にまたねばならないであろう。分布調査に関連して付言しなければならないのは、本年にはいって、岡山市教育委員会の遺跡分布調査によって、同市草ヶ部、常楽寺の東の墓地で同様の石積造構が発見されたことである。これまで、熊山以外の地域にこのような石積造構はないときれていたことにかんがみ、今後、より精密な調査が、この地域一帯の同種遺跡に実施され、その実態が明らかになることが期待される。

(坪井清足)

付 参考文献目録

1. 史 料

(1) 大亮軒『和氣相』 佛閣

帝駕山靈山寺。熊山にあり。本尊堂銀音堂の跡あり。戒壇院の跡あり。高六間広四間四方開基は唐僧鑑真和尚といへり。いにしへの兵火の後、取立る人なし。(以下略=筆者)

『吉備群書集成』(+) P. 25。宝永六年(1709)

(2) 松本亮『東備郡村志』 和氣郷 奥吉原村。

靈山寺戒光院と云ふ刹あり。これを熊山寺と称す。天平宝字年中唐の鑑真和尚の開基也。古は尤も大寺なりしが、建武の乱に堂塔焼失す。此寺に戒壇三處あり。昔は五つあり由。國中の諸寺戒壇ある處更になし。これを以て按に、當國の國分尼寺なるべきか。法皇外記に、宝字四年孝謙天皇詔あって、天下國分寺に戒壇を築かしむと云う。

『吉備群書集成』(+) P. 361 元文二年(1737)

2. 当遺跡について直接論考を加えた文献

(1) 沼田頼輔「備前熊山戒壇遺跡考」

『考古学雑誌』第15巻6号 大正14年(1925)6月。

(2) 永山卯三郎「史蹟、熊山戒壇に関する調査報告」

『岡山県通史』 P.P. 505~511 昭和5年(1930)11月。

(3) 荒木誠一「附記、戒壇址」

『改修赤磐郡誌』 P.P. 414~418 昭和15年(1940)2月。

(4) 梅原末治「古代施彩窯器の新資料」一備前熊山戒壇出土品其他一

『史蹟と美術』 202号 昭和25年(1950)5月。

(5) 梅原末治「備前熊山上の遺跡」

『吉備考古』第86号 昭和28年(1953)7月。

(6)大本琢壽「熊山雜記」
『吉備考古』第86号 昭和28年(1953)7月。

(7)大本琢壽「熊山雜記」其の二
『吉備考古』第87号 昭和28年(1953)12月。

(8)瀬見定秋「熊山巔峰」
『熊山神社』 昭和42年(1967)5月。
(9)近江昌司「備前熊山佛教遺跡考」
『天理大學學報』第85輯 昭和48年(1973)3月。

(10)齊藤忠「奈良朝の佛教遺跡と酷似点」
『朝日新聞』 昭和48年(1973)5月7日。

3. 当遺跡を参考資料として紹介又は引用している文献

(1)私立和氣郡教育会「南阿山壁山寺」
『和氣郡誌』P. 517 明治42年(1909)5月。
(2)水野精一「さまざまなる造像」
『世界考古学大系』四 P.P. 106~107 昭和33年(1958)7月。

(3)小林行雄「くまやまーいせき」
『図解考古学辞典』 P.P. 281~282 昭和34年(1959)6月。

(4)岡山県「神社と寺院」
『岡山県の歴史』 P.P. 111~112 昭和37年(1962)11月。

(5)大本琢壽「熊山戒壇址」
『日本考古学辞典』 P. 156 昭和37年(1962)12月。
(6)藤井直正「勝尾寺の勝示」
『眞面目史』第1巻 P.P. 434~488 昭和39年(1964)12月。
(7)石田茂作「佛塔の変遷」
『佛教史学』第12巻第1号 P. 5 昭和40年(1965)2月。

(6)石田茂作「段塔」

『日本佛塔』 P. 155 994図 昭和44年(1969) 3月。

(7)間壁忠彦・間壁蘿子「熊山」

『岡山の遺蹟めぐり』 P.P.74~75 昭和45年(1970) 6月。

8)福山敏男「戒壇と土塔」

『新版考古学講座』八 P.98 昭和46年(1971) 5月。

(9)石田茂作「熊山戒壇」

『日本の美術』10 P. 3, P.81, P.85 昭和47年(1972) 10月。

10)小倉豊文「答登から熊山・万富」

『山陽文化財散歩』 P.P.32~33 昭和48年(1973) 2月。

11)長光徳和「熊山戒壇遺蹟」

『岡山の宗教』 P.P.39~41 昭和48年(1973) 3月。

12)正岡勝夫「熊山遺跡群」

『熊山町遺跡地図』 P.12 昭和48年(1973) 4月。

13)熊山町訪問さん委員会「熊山遺跡」

『熊山町誌』 P.P. 154~158 昭和48年(1973) 10月。

(収録・難波俊成)



(1)「熊山遺跡」石積遺構 東から



(2)「熊山遺跡」石積遺構 南から

図版第2



(1) 国指定石積造構龕 東から



(2) 国指定石積造構龕 南から



(1) 国指定石積遺構龜 西から



(2) 国指定石積遺構龜 北から

図版第4

(1)

国指定石積遺構出土
陶製筒形容器



(2)

陶製筒形容器蓋（部分）





(1) 熊山遠景



(2) 熊山遺跡からの遠望（南方）

図版第6



(1) 鐘楼跡石列



(2) 発掘区全景



(1) A トレンチ W-2 区・平瓦出土状況

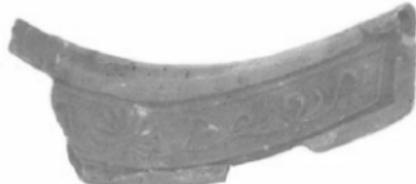


(2) 史跡内 塗状造構

图版第8



1



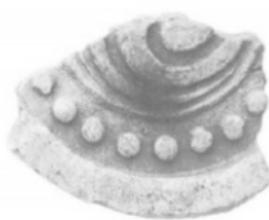
6



2



7



3



8



9



4



10



5



11

出土瓦



(1) 鬼神山 1 号 (行者様) 石積造構 (B₁)



(2) 南山崖 1 号石積造構 (C₁)

圖版第10



(1) 南山崖 2 号石積遺構 (C₂)



(2) 南山崖 3 号石積遺構 (C_a)



(1) 南山崖 3 号石積遺構 (C₃)



(2) 南山崖 3 号石積遺構 蔵



(1) 南山崖 4 号石積遺構 (C₄)



(2) 南山崖 5 号石積遺構 (C₅)



(1) 經盛山1号石積遺構 (D₁)



(2) 風神山1号石積遺構 (E₁)

図版第14



(1) 風神山 2 号石積遺構 (E_a)



(2) 風神山 3 号 (鎌治神様) 石積遺構 (E_a)



(1) 南の峰1号石積造構 (F₁)



(2) 南の峰2号石積造構 (F₂)

図版第16



(1) 南の峰3号石積造構 (F₃)



(2) 南の峰4号石積造構 (F₄)



(1) 南の峰5号石積造構 (F₅)



(2) 南の峰7号 (美音院跡) 石積造構 (F₇)

図版第18



(1) 雨の峰8号石積造構 (F₈)



(2) 大谷山1号石積造構 (G₁)



(1) 高津山南1号石積造構 (H_1)



(2) 山頂三角点1号石積造構 (I_1)

図版第20



(1) 尺八山1号 (院の墓) 石積遺構 (J₁)



(2) 獅子ガ谷1号石積遺構 (K₁)



(1) 獅子ガ谷 2 号石積遺構 (K₂)



(2) 舟下山 1 号 (犬の墓) 石積遺構 (L₁)

図版第22



(1) 烏帽子岩1号石積遺構 (M_1)



(2) 千枚行人山石積遺構 (O_1)



(1) 千躰明人山石積遺構 (O_z)



(2) 坂根竈神様石積遺構 (O_a)

図版第24



(1) 香登宮山石積遺構 (O₄)



(2) 熊山町勢力雲上山石積 (参考No38)



(1) 珠千壇石積遺跡（和気町大中山）



(2) 珠千壇石積遺跡（備前市片上）

あとがき

このたびの「熊山遺跡」の調査は、熊山町にとって画期的なものであった。

すなわち、各地において土地開発に伴なう発掘調査が進行している最中に「熊山遺跡」石積の復旧修理保存のための調査を実施するということは、人的、物的にも、日数の上でも相当困難なものであった。

調査の実施にあたっては、遺跡が標高500m前後の山上に存在すること、石積遺構分布が熊山町のほか備前市・瀬戸町・和気町の1市3町にまたがることなど問題点は多かったが関係各位の献身的なご理解とご協力によって貴重な成果をあげ調査を終了したことは誠に感激に耐えない次第である。

国指定の石積は、復旧修理されることが確約されているが、問題は多い。

分布調査の結果、各地の石積遺構は予想以上の数が発見されたが、ほとんど崩壊しており早急に保護保存の必要が痛感される。

今後この道の各位によりその究明を期待し、その保存管理の万全を期したい。

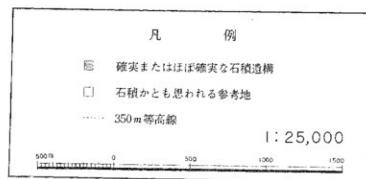
なお末尾になったが、本報告書作成までに精力的かつ献身的な作業を進めていただいた角田茂氏・難波俊成氏・正岡睦夫氏・真野義一氏に敬意を表するしだいである。

1974年3月

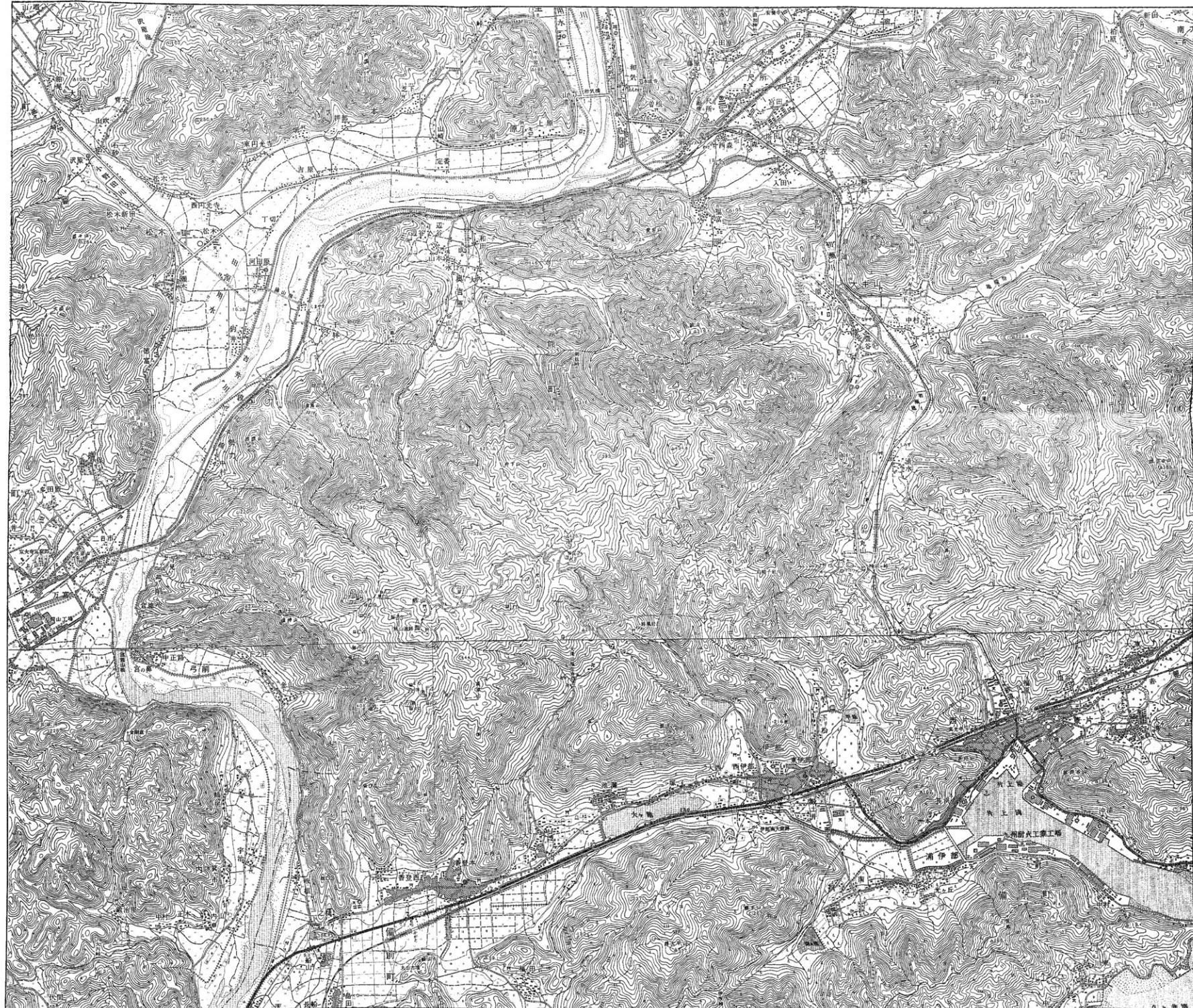
熊山町教育委員会

教育長 吉原貞郎

熊山の地形および石積遺構分布



(この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の
(2.5万分の1地図)を複製したものである。
(承認番号) 命49中復、第14号)



熊山遺跡緊急調査概報

昭和49年3月31日発行

発行 熊山町教育委員会
岡山県赤磐郡熊山町松木517

印刷 (有)久崎印刷
岡山県和気郡和気町和気818

